

フランス極右の台頭

——フロン・ナシオナル(国民戦線)1984—88年——

畑 山 敏 夫

はじめに

最近、西ドイツでは、外国人排斥とナショナリズムの主張を掲げる極右政党の台頭が伝えられている。1989年1月の西ベルリン市議選で、共和党が、7.5% (11議席) を獲得し、同年11月のヘッセン州地方選でも、国家民主党が6.6% (7議席) を得て、共和党も2つの郡議会に議席を獲得した。特に、共和党は、6月ヨーロッパ議会選挙で7.1% (6議席) を得、他の地方選挙でも高得票をあげている¹⁾。そのような極右が躍進している原因として、失業率を高めている産業構造の変化、保守の中道指向、フェミニズムや緑の党の主張に対応できない男性たちの防衛意識が指摘されている²⁾。西ドイツでの極右の台頭は、西ドイツだけの孤立した現象ではない。隣国のフランスにおいては、既に80年代の前半に、極右「フロン・ナシオナル Front national (国民戦線) = FN」が、西ドイツの場合と同様に、外国人排斥とナショナリズムの主張を掲げて、政党システムに参入し定着している。戦後長らく、極右勢力がマージナルな存在でしかなかった両国で、何故、突然に極右勢力は息を吹き返したのだろうか。そこには、両国の抱える経済的・社会的・政治的諸困難が作用していること明らかである。

1973年のオイル・ショックに端を発する経済危機は、世界経済を不況の局面に追い込み、社会的・政治的混乱を各国にもたらした。それまでに先進諸国で進められてきた福祉国家政策は行き詰まり、多様な対応が模索された。アメリカやイギリスでは「小さな政府」を掲げた新保守主義の政権が誕生し、スペイン、ギリシャなどでは社会民主主義政党が政権を握った。いずれの政府も、70年代以来続いている困難な状況を克服することを強いられている。

フランスでは、1973年に、ポンピドゥ大統領の急逝を受けて次の大統領に

就任したジスカール・デスタンは、経済・社会的危機への対処に失敗し、1981年5月、社会党のミッテランが新大統領に選ばれた³⁾。長年野党の地位に甘んじてきた左翼は、終に保守支配を突き崩し政権を手中にしたのだった。そのことは、経済・社会的危機の深化によって第五共和政を通じて安定的に持続してきた保守優位下の政党システム（＝ド・ゴール派保守、非ド・ゴール派保守、社会党、共産党）の変容を明らかにしている。以降、80年代を通じて、「コアビタシオン（保革共存政権）」といった変則的な時期を伴いつつも、基本的に左翼の支配が続くことになった。他方、80年代に新たに現われたもうひとつの現象が極右の台頭であった。

当初は短命な現象と思われていた FN の躍進は⁴⁾、89年現在まで、若干の変動はあるが基本的に持続している。今や FN は、フランスの政党システムのなかに定着している。そして、84年ヨーロッパ議会選挙以降、諸選挙の結果に多大な影響をあたえている。我々は前稿で、第2次世界大戦後の極右の伝統の中に FN を位置付け、その思想と組織を概観した⁵⁾。本稿においては、対象とする時期を1984年から88年に限って、その間に行なわれた全国レベルの諸選挙（1984年ヨーロッパ議会選挙・86年国民議会選挙・88年大統領選挙・

表1 第5共和政における極右の得票

選 挙		得 票 数	絶対得票率	有効得票率
1958	国民議会（第1回）	426,644	1.9%	2.6%
1692	レフェランダム（エビアン協定）	1,809,074	6.6	9.2
1962	国民議会（第1回）	139,200	0.5	0.8
1965	大統領選挙（第1回）	1,260,208	4.4	5.2
1967	国民議会（第1回）	124,862	0.4	0.6
1968	国民議会（第1回）	18,933	0.1	0.1
1973	国民議会（第1回）	122,498	0.4	0.5
1974	大統領選挙（第1回）	190,921	0.6	0.8
1978	国民議会（第1回）	210,761	0.6	0.8
1979	ヨーロッパ議会	265,911	0.8	1.3
1981	国民議会（第1回）	90,422	0.2	0.4
1984	ヨーロッパ議会	2,210,334	6.0	11.2
1986	国民議会（第1回）	2,760,880	7.4	9.9
1988	大統領選挙（第1回）	4,375,894	11.5	14.4
1988	国民議会（第1回）	2,391,973	6.3	9.8

出典：N. Mayer et P. Perrineau (dir.), Le Front national à découverte, 1989, p. 59.

国民議会選挙)に焦点をあてて分析を試みてみたい。そのことによって、第1に、1984年ヨーロッパ議会選挙に始まるFN躍進の諸要因とその態様をより詳細に明らかにし、第2に、86年、88年の諸選挙においてFNの勢力の定着とその変容を検討し、第3に、FNの台頭がフランスの政党システムに如何なる影響を与えているのかを明らかにすることが本稿の目的である。既述のように、フランスにおいて定着してきた政党システムは80年代に入ってから変わり始めている。FNやエコロジストといった新興の政治勢力が登場し、左翼の中で強力な勢力を誇ったフランス共産党が衰退し、保守勢力は分裂し、左翼から政権を奪還する決意手を欠き、ひとり社会党だけが漁夫の利を得ている観がある。本稿において、変わりつつあるフランス政治のなかで、FNの存在が如何なる意味を持ち影響を与えているかを明らかに出来ればその目的は果される。

- 1) 田村光彰「いま、なぜ?西独で極右勢力台頭」『エコノミスト』1月16日号、82頁。
- 2) 同前、83頁
- 3) Alain et Marie-Thérèse Lancelot, L'évolution de l'élection française, in Stanley Hoffmann et George Ross (eds.), L'expérience Mitterrand, 1986, p. 107.
- 4) 当時、多くの者が、過去のブジャード運動などの例から、FNの躍進が一時的現象(feux de paille)であると見ていた。例えば、ヨーロッパ議会選挙の後で『エスプリ』誌に掲載されたピエール・マヨールの論説が、そのような見解をよく示している。彼は「明らかなことは、1986年の国民議会選挙では、目を見張る後退を記録するだろうということである。……ルペン周辺の結合は、束の間の脆弱なもので、間もなく解体するであろう。」と予測している。Pierre Mayol, 'Un tribun parmi les siens', *Esprit*, 93, septembre, 1984, p. 74.
- 5) 拙稿『フランス極右の現在—フロン・ナショナル(国民戦線)とルペン』、『政治学研究』36号(九州大学政治研究室, 1989年)で、FNの歴史、組織、思想を取り扱っているため、本稿と併せて読まれたい。

1. 政党システムへの参入と定着

(1) 1984年ヨーロッパ議会選挙

既存の政党システムに、なんらかの新しい政治勢力が登場する場合、その政治社会に変動が生じていることを示している。例えば、戦間期にファシズ

ム諸政党が台頭した時、深刻な経済危機と社会的・政治的混乱を背景としていた。また、現在においてエコロジー諸政党が躍進を続けているのは、産業社会の行き詰まりを反映したものである。同様に、80年代に入って、FNが新しい政治勢力として登場し、政党システムの恒常的要素として定着したのも、オイル・ショックに端を発する経済危機の高まりと社会的・政治的混乱をその背景に持っている。

フランスでは、1980年に入っても、失業の増大を始めとして経済環境は悪化していき、それに適切に対処出来なかったことに、ジスカール・デスタンが大統領選挙に敗れる最大の要因があった。しかし、保守政権にとってかわったミッテラン政権は、財政支出を増やすことによって国民の購買力を高め、経済不況を脱するという左翼版ケインズ政策を実施した¹⁾。結局、国有化や地方自治などの制度的諸改革の評価はともかく、経済的困難の克服に関する限り、社会党の政策は失敗し、政策の転換を余儀なくされる。1982年の後半からモーロワ政府は、引き締め政策に転じていく。財政・金融危機を克服し、生産を回復するために、その負担は賃金の抑制、失業の増大、インフレの進行などの形で民衆層に転嫁された²⁾。その結果、当初、左翼政権への期待が大きかっただけに、国民の間に失望が生まれ、ミッテラン大統領、モーロワ首相への国民の支持は急速に後退していく³⁾。他方、保守は、1981年の国民議会補選、82年の県議会選挙、83年市町村議会選挙と左翼に勝利し、ミッテラン政権の人気低下に乗じて勢力を盛り返した。注目すべきは、83年市町村議会選挙の際に、人種主義的キャンペーンが展開され、それが一部の選挙民に受容されたことである⁴⁾。民衆層の経済的困窮、社会的不満の醸成は、彼らの中に反移民的感情を高めていった。

さて、以上のような文脈において1984年ヨーロッパ議会選挙が闘われたのであるが、FNの躍進は、前年から既に始まっていた。ドゥルー、オルネー・ス・ボワの市議会議員選挙、モルビアン⁵⁾の国民議会補選で、FNは、それぞれ16.72%、9.32%、12.02%と、極右としては画期的な得票率を挙げ始めていた。しかし、それらの成果は地方選挙でのことであり、果たしてFNが、全国レベルの選挙でも同様の躍進を遂げれるかが注目された。結果は、2,204,961票(得票率10.95%)を獲得して、FNの躍進が決して偶然のもので

表2 1984年ヨーロッパ議会選挙のFN・P FN支持者の81年大統領選挙での投票

候補者	1981年
G. マルシェ	1%
F. ミッテラン	17%
V. ジスカール・デスタン	30%
J. シラク	25%
M. デブレ, M-F・ガロー	3%
B. ラロンド	1%
その他*	23%

*棄権, 無回答, 81年の時点で選挙権が無かった者
出典: J. Chatain, Les affaires de M. le Pen, 1987, p. 166.

表3 FN有権者の政治的越源(%)

左右スケール上の位置	
極左	2
左翼	5
中道	19
右翼	25
極右	44
無回答	5
政党支持	
共産党	1
極左	—
社会党	9
左翼急進派	1
エコロジスト	2
UDF	12
RPR	33
FN・P FN	24
無回答	18

出典: E. Plenel et A. Rollat, L'effet Le Pen, 1984 p. 130.

はないことを示した。

ヨーロッパ議会選挙での, FN の大量得票の実態については, 前稿で分析したが, 簡単に紹介しておこう。まず, FN 有権者が, 以前の選挙でどのような支持傾向をもっていたのかをみておけば(表2), 1981年大統領選挙第一回投票では25%がJ・シラクに, 30%がジスカール・デスタン, 3%がデブレ・ガローに, 17%がミッテランに, 1%がB・ラロンド(エコロジスト候補)に投票している⁵⁾。また, FN 有権者に自己の政治的立場を尋ねた調査にも(表3), 極左2%, 左翼5%, 中道19%, 保守25%, 極右44%という回答が寄せられている⁶⁾。

以上の結果から, FN 有権者の政治的傾向について次のようなことが言える。第1に, 従来の極右票がFNに流入したことである。表3からも, 極右と自己を位置付ける有権者が24%もありFN有権者の中核を構成していることがわかる。1972年10月に, 極右の結集体として結成された

FN は, 指導部から党员, 支持者まで, 極右的体質を持った者たちを擁していた。FN の指導部をみてみれば, 党首のルペン以下, ジャン・ピエール・ステイルボワ Jean-Pierre Stirbois, ミッシェル・コリノ Michel Collinot, ロジェ・オランドル Roger Holleindre らの FN 幹部は, 過去に極右運動に携わっていた者が大部分であった⁷⁾。また, FN が, 地中海沿岸諸県で高得票をあげ

ているのは、アルジェリアからの帰還者であるピエ・ノワールの支持が FN に寄せられていることによる⁸⁾。彼らは、FN 支持者の中では、「固い支持層」を形成しているといえる。

第 2 に、左翼政権に対する不満から、極右へと支持を転じる選挙民が存在したことである⁹⁾。彼らは、FN に魅力を感じて票を投じたというよりは、政治への不信と異議申し立ての機会として利用していたといえよう¹⁰⁾。彼らは、左翼政権下での経済的・社会的苦境に抗議するために FN に投票したのであって、決して FN の安定した支持層とはいえない。しかし、失業を始めとした生活の困難が緩和されない限り、そのような投票動向はなくならないし、後述するように、84 年以降、FN 有権者の中でその比重は増して行く。

第 3 に、FN に、大量の保守票が流入したことである。左翼政権の成立と、共和国連合 (RPR)、フランス民主連合 (UDF) がそれに強硬な対決姿勢をとらないことにいらだつ一部の保守支持者は、RPR、UDF から FN へと支持態度を変えた¹¹⁾。いわゆる急進化した保守支持層が、より権威主義的で、左翼政権に対して強硬な FN へとシフトしていったのである。ヨーロッパ議会選挙では、FN 躍進の最大の要因は、保守支持層からの票の流入にあった。1981 年大統領選挙でジスカール・デスタンに投票した者は 30%、シラク 25%、デブレ・ガロー 3% となっており、84 年の FN 有権者のうち、従来保守に投票していた者が 58% もいることになる。それは、決して偶然の現象ではない。FN は、その結成以来、極右の狭い支持基盤を広げ、政治的ゲッターから抜け出すことを主要戦略としていた。そのために、FN は、ヨーロッパ議会選の候補者選別に際して、保守的傾向の人物を数多くリストに入れて、保守の有権者の獲得を図っている¹²⁾。また、ディスクールの穏健化を進めて極右に付き纏っていた急進的イメージを薄め、左翼政権の下で脅かされている諸自由の擁護や伝統的諸価値の尊重を前面に出すなど、保守層にアピールする努力も払っていた¹³⁾。

そのような FN の「穏健化」戦略が功を奏してか、83 年 10 月の世論調査では、ルペンと FN に対する、RPR・UDF 支持者の態度は好意的で、FN との協力を望む声も高まっている¹⁴⁾。FN の保守層への浸透は、有権者だけでなく、RPR・UDF の有力者や一般党員に及び、多くの者が FN へと移っていっ

表4 1984年ヨーロッパ議会選挙のFN有権者の社会的構成(%)

		FNリスト	有権者全体
性 判	男 性	59	48.5
	女 性	41	51.5
年 齢	18—24	14	14
	25—34	18	24
	35—49	26	24
	50—64	23	21
	65以上	19	28
職 業	農業・農業被用人	7	6
	小規模商業・手工業	5	5
	上級カードル, 自由業	15	11
	中級カードル, 事務職	21	22
	労働者	25	28
	無職・退職	27	28

出典：E. Plennel et A. Rollat, op. cit., 1984, p. 129.

た¹⁵⁾。以降、FNの選挙での成績は、保守支持層の動向に左右される。

以上、FN有権者の政治的傾向から、FNの躍進は、極右から左翼まで、程度の差はあれ、広範にその支持層を拡大していることに、その成功の要因があることがわかる。

さて、次に、ヨーロッパ議会選挙での、FN有権者の社会的特質をみておこう(表4)。まず、男女別では、男性の比重が顕著に高い。女性の割合が高い保守有権者と比べて、FNが男性に片寄っているのは、その主張が、非常に攻撃的で激しいことが、女性の支持を集めなかったものと思われる。次に彼らの職業分布であるが、まず、商人・手工業者の支持を得ていることである。それらの階層を中心的な担い手とする1950年代半ばのブジャード運動とよく比較されるのだが¹⁶⁾、FNの場合も、フランス社会の近代化から取り残された者たちの価値観や利害、不満を表現している面がある。例えば、FNは、ブジャード運動と同様に、反税制的主張を中心的争点の一つにしているし、フランスの諸伝統の擁護を唱えるなど、旧中間層の動員が見込まれるアピールを行っていた。また、反移民的キャンペーンは、都市やその周辺に在住するかれらの支持を引き出したと言える。

商人・手工業者と並んで、FN の民衆的支持層を形成しているのが労働者層であった。FN のイデオロギーが「ナショナル・ポピュリズム」と性格付けられることがあるが¹⁷⁾、そのような民衆的な支持を調達しているところが、保守諸党と違う点である。何故、FN に労働者の支持が顕著であるのかを説明するのは難しいが、第 1 に、移民と職場や地域で接触するなかで、労働者、特に、その下層の部分に移民排斥的動きが生じていることと関連があるであろう¹⁸⁾。第 2 に、左翼政権が、初期の改革路線を変更し、緊縮路線に転ずることによって、失業・購買力の低下など、労働者を取り巻く環境は悪化していったが¹⁹⁾、それによって、かれらの左翼政権に対する失望が広がっていった。81年にミッテランに投じた者から FN 支持に転じた中に、多くの労働者層が含まれていたと推定できるし²⁰⁾、FN の特徴である、失業者・青年層からなる「新しい貧困者」にも高い支持を得ていた²¹⁾。

さて、民衆的支持層の他に、FN の躍進を支えたのは、上級カードル・自由業の比較的な富裕な層であった。その層は、従来、保守政党の支持基盤であったが、左翼政権の成立に危機感を持ち、それに対して強硬に対処していない保守政党にいらだち、保守政党への「懲らしめ票 vote de sanction」として FN に票を投じた²²⁾。また、FN の側でも、既述のように、左翼政権によって脅かされている諸自由を擁護するキャンペーンを展開し、経済的リベラリ

表 5 保守・極右支持者の政治的態度(%)

	FN・PFN	RPR	UDF	全体
堕胎の自由化は進歩である	53	40	34	49
家族・労働・宗教の尊重	35	47	47	33
ゴースムの語のプラス評価	54	69	61	39
左翼に対して野党が合法性を 抜け出すことを望む	27	8	10	7
政治家は当選後公約を忘れる	72	57	54	42
死刑復活	88	71	61	57
移民数削減・帰国奨励	75	81	79	70
国家権威の防衛	35	19	11	21
国内秩序の再建	62	54	49	37
ヨーロッパ共同防衛への反対	43	38	34	39
同盟国のための参戦	56	48	46	35

出典：E. Plenel et A. Rollat, op. cit., p. 127.

表 6 ユーロッパ議会選挙での 2 つの主要の投票動機
(SOFRES)

	全体 (%)	FN	UDF RPR	PS	PCF
治安	15	30	17	8	9
社会的不平等	16	10	7	24	33
ヨーロッパ統合	25	8	25	34	13
失業	24	17	20	27	37
私学教育	10	14	16	3	4
移民	6	26	3	3	2
自由	19	19	24	13	10
世界におけるフランスの役割	16	11	18	16	11
物価	10	6	11	11	14

出典：J. Lorien, K. Criton et S. Dumont, Le système Le Pen, 1984, p. 221.

ズムを前面に出すなど、彼らにアピールするテーマを利用した。FN は、従来まで、極右が克服出来なかった極端に狭い支持層という限界を、遂に突破し、民衆的な層からも富裕な層からも支持を調達することに成功した。そのように、「包括政党化」しえたところに、FN が、従来の極右には見られなかった強さがある。

それでは、FN に従来にない幅広い支持をもたらした有権者は、どのような政治的見解を持っていたのかを確認しておこう（表 5）。

FN 支持者の政治的態度で、まず顕著なことは、国民全体と比較して、移民数の削減を求める意見が多いことである。死刑の復活という治安強化を望む態度と併せて、FN 支持者の中で、如何に移民—治安のテーマが浸透しているかが理解できよう²³⁾。

次に、政治家が公約を忘れているという意見が多いが、FN 支持者は、既成の政治に強い不信と不満を感じ、非既成政党の FN を選んでいると考えられる²⁴⁾。第 3 に、保守が左翼に対して合法性を脱することを求めているが、保守の左翼政府への「弱腰」に飽き足りない急進化した保守支持者の存在を示している²⁵⁾。第 4 に、国家権威の重視や防衛問題への態度から、FN 支持者には、権威主義でナショナリスティックな価値感が強く共有されていることが解かる²⁶⁾。最後に、墮胎に対する肯定的態度や、家族・労働・宗教の尊重とい

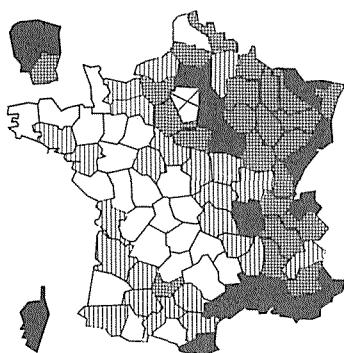
った伝統的諸価値への執着の弱さに、FN 支持者の保守支持者と異なる側面がある²⁷⁾。以上の点から、FN 支持者の、既成政党に飽き足らない、権威主義的でナショナリスティックな像が浮かび上がってくる。FN は、既成保守の思想的態度を増幅した急進的な保守支持層と、より非政治的で現実社会に不信と不満を強めている層を結集していることが確認しうる。

次に、選挙に際して、有権者が重視した問題を見ておけば(表 6)、FN 有権者の場合、やはり、治安、移民の 2 つが他党に比べて群を抜いて高い。そのような特徴は、以降も一貫して続くが、上記のような政治的見解を持つ有権者は、移民・治安の争点を介して FN へと流れこんで来たことが分かる。

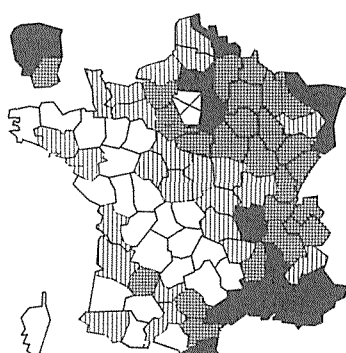
最後に、FN 票の地域分布に触れておけば、以降の選挙でも一貫して見られる特徴であるが、FN の好調な地域は、フランスを 2 分して東半分に集中していることである。即ち、FN の強い 5 つの地域はプロヴァンス-コート・ダジュール、ラングドック-ルジヨン、ローヌとヴォクリューズ県、パリ地域、東部諸県に分布している(得票地図参照)。そのことから、FN は、都市的・工業的地域で好成績を収めていることが分かるし、失業・移民・治安といったテーマを中心に据えた FN のキャンペーンが、経済的・社会的諸困難を抱

FN 得票地図

1984年ヨーロッパ議会選挙

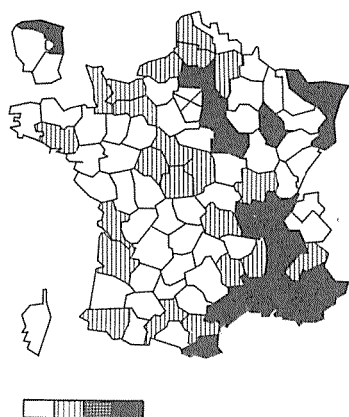


1986年国民議会選挙



出典：N. Mayer et P. Perrineau, op. cit., p. 40.

1988年大統領選挙



える都市的・工業的地域で共鳴盤を見出したと言える。

さて、FN にとって、ヨーロッパ議会選挙がもった意味は重要であった。1972年に結成されて以来、マージナルの存在に甘んじてきた FN は、1984年に、遂に政党システムの一画に参入したのだった。以降、既成諸政党は、特にその支持者の競合する保守政党は、FN の存在によって、大きく影響されることになる。(後述)。

なお、翌年には、県議会選挙が行われたが、82年の県議会選挙では、少数の候補しか擁立できなかった FN は、今回は、全国で4分の3の選挙区に1521名の候補を立て、8.8%を得票している²⁸⁾。FN の県議会選挙での善戦は、地方的利害や候補の希望性が影響し、地方での組織化の進展が問われる地方レベルの選挙でも、通用することを示した。そして、83年以来の、FN への追い風がまだ続いていることも確認された²⁹⁾。

(2) 1986年国民議会選挙

86年の国民議会選挙も、FN にとっては、重要な意味を持つ選挙であった。というのは、FN の躍進が偶然のものか、それともこれから先暫くは続く現象であるのかを占う意味を持っていた。それと、ヨーロッパ議会選挙は、国内政治にとってそれほど実質的な意味をもっておらず、そのぶん有権者は気軽に投票出来たが、国民議会選挙では、国内政治の争点をめぐって、より真剣な政党選択がおこなわれ、また、各県ごとでの争いであるから、各政党の全国的な組織力が問われることになる。

さて、86年の国民議会選挙は、左翼にとっては、非常に厳しい結果が予想されていた。ファビウス政府の下で、経済状況は改善されつつあったのだが³⁰⁾、政府への不満の増大、保守への支持の高まりといった傾向は持続したま

まであった³¹⁾。他方、ルペンと FN の人気は、世論調査で見る限り衰えを見せていなかった³²⁾。また、国民議会選挙の投票システムが県別比例代表制に改められることによって、2 回投票多数代表制よりも少数党に有利になった。

以上のような、FN にとって有利な状況の下で選挙に臨んだわけであるが、FN は約270万票(得票率9.8%)を獲得し、84年を下まわったとはいえ、極右としては国民議会選挙では画期的な成績であった。それでは、FN は、今回は、如何なる支持層を集めていたのか。まず、指摘すべきことは、FN 有権者の定着である。1984年の FN 有権者のうち再び FN に投じているのは64%である。他党が軒並み80%以上の歩留まり率を示しており、それに比べれば、FN 有権者の定着率は低いが、それでも、3 分の 2 の有権者が FN のある程度固定的な支持層を構成していることは注目すべき現象である。

そのように、FN の「固い支持層」は存在していたが、今回、FN の得票が減った最大の理由は、保守 RPR-UDF へと31%の票が逃げていることである³³⁾。それに対して、保守側からは4%の票しか FN に流れ込んでいない。1984年に保守に対する「懲らしめ票」として FN に投じられた票が、再び、保守に還流していった。そのことの説明としては、第一に、84年ヨーロッパ議会選挙において、保守側はシモーヌ・ヴェイルを代表とする統一リストで戦ったのだが、彼女が保守の中ではリベラルで、かつて堕胎を合法化する法律を成立させたことから、保守支持層の中にはヴェユ・リストを嫌って FN に投じるものが出た³⁴⁾。今回は、その条件は存在しなかった。第2に、保守優位の下、そして、ヨーロッパ議会選挙と違って、直接に権力の移動をもたらすだけに、有権者の心理に「有効投票 vote utile」の配慮が働いた³⁵⁾。第3に、左翼政権が改革路線を放棄し、よりコンセンサスを重視した統治スタイルを採用したことで、保守有権者の左翼政権への敵意が緩和されたことである³⁶⁾。

次に、FN 有権者の社会的属性であるが、今回は、手工業・商人層、上級カードル・自由業で後退しており、代わって、労働者、事務職、失業者で増加している³⁷⁾。明らかに、FN の支持者の構造において、比較的富裕な層からより下層へと比重が移ってきている³⁸⁾。そのことは、地域レベルでの FN の得票を見れば明らかである。

表7 1986年国民議会選挙におけるFN有権者の社会カテゴリー別得票率(%)

性別	男性	12
	女性	7
年齢	25以下	9
	25—34	8
	35—49	9
	50—64	12
	65以上	9
職業	農業	11
	自営業	14
	専門職・	
	上級カードル	9
	ホワイト・カラー	8
	労働者	11
	退職その他	9

出典：Howard Penniman (ed.),
France at the Polls, 1981 and
1986, 1988, p. 226.

表8 1986年国民議会選挙投票動機(%)

	全体	共産党	社会党 MRG	UDF/ RPR	FN
失業	28	44	20	33	13
購買力	17	22	13	20	7
社会的既得物	15	14	38	3	1
移民	10	3	4	8	46
治安	8	3	2	10	18
税金	6	2	3	9	6
物価	5	4	9	4	2
外交	4	1	4	5	2
無回答	7	7	7	8	5

* I FOP調査

P. Perrineau, 'Front national l'écho politique de l'anomie urbaine', *Esprit*, 3-4, avril 1988, p. 26.

例えば、マルセイユでは、84年には、FN は、中部・中南部のブルジョワ的街区、南部・東部の富裕地区で大量に得票したが、86年には、そこでは後退している。代わって、北部の中間層の多い地区で伸びている³⁹⁾。トゥールーズでも、84年には、中心部のブルジョワ的街区で躍進したが、86年には後退し、代わって中心部南西の中間層街区で伸び、中心部でも小商人・手工業者の多い街区は FN への支持を続けている⁴⁰⁾。そのような傾向は、リール、リヨン、パリの事例研究からも確認しえる⁴¹⁾。また、セヌ・サン・ドニ県の事例でも、84年に、FN が県の得票平均を上まわった21都市のうち、13都市は保守市政であったが、86年には、共産党の伝統的地盤で健闘し、得票が県平均を上まわった14都市のうち、8都市は共産党市政であった⁴²⁾。FN の地盤が、保守的有権者から民衆的有権者へとシフトしていることが読み取れよう⁴³⁾。

次に FN 有権者の投票動機を見ておこう(表8)。84年の投票動機は、移民・失業・私学教育・購買力の維持といった諸問題が上位を占めていたが、86年においても、そのような構造は変わっていない。彼らの関心は、移民・治安・失業・購買力の順であり、移民問題が依然として、FN の支持調達の最大のテーマであった。全有権者平均は10%であるにもかかわらず、FN 有権者の場合は46%と突出しているし、84年より8%も増加している。FN の有権者が、民衆的な層にシフトすることによって、都市部の移民地区、もしくは、それと隣接する地区に居住する者たちの、移民への嫌悪・反発をよりストレートに反映した結果とも解釈しうる⁴⁴⁾。

そのような移民問題に対する FN 有権者の敏感さであるが、FN が一貫して訴えているのは、移民の存在が、失業・治安の悪化・社会保障への過重負担などの「悪弊」をもたらしているだけでなく、フランス人の国民的アイデンティティを脅かしているという点であった。FN は、移民の集中的に居住する都市的フランスにおける、国民的アイデンティティを脅かされているとの強迫観念、現実の経済的・社会的困難の原因を移民の存在への投影を政治的に利用することで、都市部を中心に無視しえない勢力を築いていた⁴⁵⁾。84年に、FN 有権者の重要な構成要素であった政治的動機よりは社会的異議申し立ての性格の強い有権者の比重が、86年には、更に高まった⁴⁶⁾。故に、86年の FN 有権者は、「ペシミズムが拒絶の有権者を支配」⁴⁷⁾、「排口票 le vote

exutoire」⁴⁸⁾などと性格づけられるのである。

84年に、初めて政党システムへの参入を果たし、85年の県議会選挙で、地方での集票能力を発揮したFNは、86年国民議会選挙で、既成の政党システムに定着したことを示した。同時に行なわれた地域圏議会選挙でも、FNは9.6%を獲得し、県議会に続き、地方における政治勢力として一定の地位を手に入れた⁴⁹⁾。全国・地方のレベルを通じて、FNは、今や、1980年代始めまでのフランスを支配していた左翼-右翼の2元構造バランスを崩す要因として定着し、フランス政治において最大の政治的重要性をもつ大統領選挙を2年後に控え、その存在は、その帰趨を左右する攪乱要因となった。

(3) 1988年大統領選挙・国民議会選挙

88年の大統領選挙は、86年の国民議会選挙で左翼陣営が敗北し、RPR党首J・シラクが首相に就任するという「コアビタシオン(保革共存政権)」の下で闘われた。ミッテラン大統領は、フランスの政治生活において初めて経験する変則的な統治形態を選択したが、結果として、それは、ミッテランを利することとなる。81年における左翼側の勝利は多分に予想外のものであったが、今回は、ミッテラン有利の予想下で選挙選は展開した。81年以来、保守に有利に展開してきた世論は、シラク、バールの人気は下降するといったように、保守にとって思わしくなかった。そして、保守内部での候補者の一本化が困難であるといったマイナス要因もあった。そこに、極右の側からの挑戦といった要素が加わったのであった⁵⁰⁾。

今回の大統領選挙において、FNは、過去最高のスコアを達成する。4,367,269票(14.4%)を得て、PCFの候補ラジョワニを遙かに凌いだ。FNがそのように大量得票することは、ある程度は予想しえたことであった。87年12月の調査で、FNへの投票意志を示した回答者は8%であったが、選挙が近づくにつれてルペンの人気は上昇し、88年4月には10%に達している⁵¹⁾。

ルペンは、96県中76県で10%を越え、8県では20~30%を獲得するという健闘を見せ、北東部工業地域や地中海沿岸諸県の9県でバール、シラクを凌駕している。特に、FNの最有力拠点の1つであるブッシュ・デュ・ローヌ県では、県都マルセイユで28%を得て、他の諸政党の候補を凌いだ⁵²⁾。FNの票

は、従来強かった地域で好調に伸び、その他の地域にも拡大している。

さて、何故、今回ルベンは、そのような高得票を上げたのだろうか。86年のFN有権者のうち、今回もFNに投票した者は90%に及んでいる⁵³⁾。従来に比べても異常に高い票の定着率が、FNが健闘した大きな要因であった。それに、今回新しくFNに投票した有権者が加わる。そのうちの49%は保守から、33%は86年に棄権したか選挙権のなかった者から、18%は左翼から流れ込んでいる⁵⁴⁾。結局、ルベンの有権者は、9～10%が1984-6年から引き継がれた固定層、4～5%が新たな有権者で構成されていた⁵⁵⁾。88年大統領選挙のFN有権者は、極右への帰属意識を持っているものが極端に少ない。他方、左翼・右翼どちらでもないと答える者が多い。そのことは、86年の時点でも指摘されていることであるが、政治的に既成の党派に加担しない非政治的な層が多くFNに票を投じていることを示している。自己を、右翼、どちらかといえば右翼と見なす、本来なら保守の支持に向かってもおかしくない層(42%)と、左翼に親近感を持っている層(8%)というように、FNは、雑多な政治的傾向を含み込んでおり、全ての政治勢力に侵食しており、そこに、大量の票を集めた要因があった⁵⁶⁾。

それでは、今回のFN有権者の社会的属性を見てみよう(表9)。先ず、目につくのは、小商人、手工業者の他候補に比べての多さである。そして、事務職・商業事務・労働者・サービス業にも大きく喰い込んでいる。84年以来の、都市部の庶民的階層を基盤とする点は、今回も同じである。84年には、商人・手工業者、自由業・カードル層で高い支持を得て、86年には、商人・手工業者の他に「怒った民衆」に支えられたFNは、今回は、農村部でも票を伸ばし⁵⁷⁾、全ての階層から支持を集め、特に、自営業者とブルーカラー層で20%以上を獲得し、「プジャーティズムと労働者の意義申し立ての総合を実現」したと表現されている⁵⁸⁾。

そのことは、FN有権者の投票動機からも確認しうる(表10)。移民・治安・失業という、FNの成功を支えてきたテーマは不動の位置を占めているが、今回は、移民・治安とも増えているが、注目すべきは、失業問題が大きく伸びていることである。物価への関心も倍以上に増えていることや税金、社会保障への関心が高いことと併せて、FN有権者の中で、経済的環境に敏感な層が

表9 1988年大統領選挙における
ルベンの社会カテゴリー別得
票率(%)

性別	男	17
	女性	10
年齢	18—24	15
	25—34	11
	35—49	17
	50—64	14
	65以上	12
職業	農業	18
	小規模商人・手工業	31
	自由業	21
	上級カードル	14
	教員・社会医療	
	サービス	6
	中級カードル	16
	事務職	11
	商業従業員	21
	労働者	16
	サービス業	15

出典：Le Monde, *Dossiers et documents - L'élection Présidentielle 1988*, p. 41.

表10 1988年大統領選挙投票動機(%) *複数回答

	ルベン	シラク	パール	ミッテラン	ラジョワニ	全体
移 民	59	21	17	13	12	22
暴力・治安	55	44	31	21	18	31
失 業	41	41	41	47	59	45
税 金	24	20	18	20	27	20
社会保障	21	20	16	28	41	24
フランス経済の競争力	21	35	35	16	12	23
教育・職業訓練	20	26	33	31	33	29
社会的不平等	18	17	18	43	50	31
世界におけるフランスの役割	16	30	30	17	9	21
ヨーロッパ統合	15	31	31	20	7	21
物 価	13	12	12	17	34	15
民営化	7	5	5	6	18	8
環境・エコロジー	6	8	8	9	16	11

C S A調査 (1988年4月24日)

出典：N. Mayer et P. Perrineau (dir.), op. cit., p. 62.

増えていることがうかがえる。労働者、商業事務員、小商人・手工業といった、比較的都市部に多いであろう民衆的階層の支持が増大していることと考え併せれば、都市の社会的・経済的な環境の悪化に直面し、その不満と絶望感を、FN への投票によって政治的に表現する社会的異議申し立て票が、従来以上に、FN を選挙で押し上げていることが推定しうる。ルペンは、冷淡な政治的エスタブリッシュメントに敵意を持つ庶民のチャンピオンになった⁵⁹⁾。

次に、大統領選挙の直後実施された国民議会選挙の結果を紹介しておこう。88年の大統領選挙は、「コアピタシオン」の形でフランス政治を支配する左右両翼の政党に対する抗議の票を、あらゆる政治的傾向をもつ社会層から結集することで、FN はかつてない高い得票を記録した。しかし、現行の政治に対する不満・不信から、死票化するのを覚悟でルペんに投票した有権者も、大統領選挙後すぐに行なわれた国民議会選挙では、必ずしも同じ選択を繰り返さなかった。そのことは、事前の世論調査で予測されたことだが、大統領選挙でルペんに投票した者のうち、国民議会選挙で FN に入れると答えた者は 57% しかいなかった⁶⁰⁾。結果は 9.65% の得票で、予想通り後退した。FN は、大統領選挙に比べて、4 選挙区以外の全選挙区で票を減らしている⁶¹⁾。

しかし、むしろ先の大統領選挙の得票が、FN にとって予想外の高得票なのであった。84年の躍進以来、FN は、10%内外の得票で推移してきており、今回の結果も、決して、FN の敗北とは速断しえない。票数においても約236万票を獲得しており、ヨーロッパ議会選挙の220万票を上回っている⁶²⁾。

それでは、FN が、大統領選挙に比べて得票を減らしているのは何故だろう。それは、第 1 に、政治への不満が、大統領選挙の時はルペンへと向かったが、今回は、棄権にそれが流れたからである⁶³⁾。第 2 に、86年の国民議会選挙の時は、広く保守の有力者を集めたりストで臨んだが⁶⁴⁾、今回は、急に選挙が行われたため、準備が整わず、党の人材を越えて広く候補を発掘出来なかった⁶⁵⁾。国民議会選挙は、地方レベルでの組織の強弱が結果を左右するだけに、FN にとって、それは極めて不利であった。結局、社会党、共産党、UDF、RPR は、地方議員の強固な資源をもっており、FN の組織的脆弱性が露呈したと言えよう。第 3 に、今回は、RPR・UDF は、統一リスト「結集・中道リスト」Union du rassemblement et du centre」で選挙にのぞみ保守の統一が成っ

たことで、「有効投票」の心理が有権者に働いたことである⁶⁶⁾。

さて、今回の FN 有権者のプロフィールを紹介しておけば、今回も、86年
以来の「プロレタリア化」の傾向が持続しており、大統領選挙と比べて、商
人・手工業者で大幅に後退してはいるが（10→3%）、労働者で大幅に伸びて
いる（16→26%）。そして、その投票動機においても、従来の移民・治安・失
業といったテーマへの関心の集中は持続している。民衆の有権者に依拠する
社会的抗議票としての FN への投票は、完全に定着したようである⁶⁷⁾。

1984-88年における、FN の選挙結果からそのような傾向は明らかに読みと
れる。FN は、18-24歳の若年層で高い支持を得ており、特に、1988年の大統
領選挙でその傾向は顕著である。その背景には、若年層に集中する失業問題
の影響が影を落としているが、新有権者や棄権層から多くの青年層の支持を
集めていることに、抗議票の対象としての FN の特質が表われている。

また、職業構成からも、84年には多い上級カードル・自由業が減少し、農
業、手工業・商業、労働者、サービス業といった民衆層で増大している。FN
支持層の「プロレタリア化」が進行しているのが分かる。更に、失業者にお
いても指示が顕著に増えており、そのことから、社会的抗議の意味合いを
持った票が FN に益々集まっていることが推定しうる。

さて、84年の「ブルジョワ的」有権者が、86年には保守側に復帰していき、
民衆的・社会的異議申し立ての手段としての色合いが濃くなった事は、FN に
とって大きな意味を持つていよう。即ち、第1に、FN の選挙における好不調
が、社会的不満・政治的抗議の水位に依存しているので、状況への依存度が
極めて高い。もし社会的・経済的状況が改善に向かうなら、FN は壊滅的打撃
を被る可能性がある。第2に、極右の体質を穏健化することで転換し、既成
の政党システムに参入し地歩を固めるという FN の目論見にとって、既成政
治システムに敵意を持つ支持者の増大は障害と成る可能性がある。名望家層
を候補に担ぎ、党の信頼性・威信を高めるという戦略が機能しなくなる危険
性がある。

以上、FN の有権者像を、1984-88年の選挙を通じて見た。誰が、何故に FN
に投票したのかが明らかになり、FN 有権者の変質も確認しえた。ともあれ、
FN は、1984-88年を通じてフランスの政党システムに参入し、恒常的要素と

して定着した。そして、今や、FN は、フランスの政党システムに攪乱的影響を与えている。特に、それは、左翼よりも保守の側に当てはまる。次章においては、FN の存在が政党システムに如何なる影響をもたらしているかを検証してみよう。

- 1) Peter A. Hall, *Socialism in One Country: Mitterrand and the Struggle to Define a New Economic Policy for France* in Philippe G. Cerny and Martin A. Schin (eds.), *Socialism, the State and Public Policy in France*, 1985, p. 84, D. S. Bell and Byron Criddle, *The French Socialist Party-The Emergence of a Party of Government*, 1984, pp. 153-4. 長部重康編『現代フランス経済論』（有斐閣、1983年）287—91頁。
- 2) Hugues Portelli, *La politique en France sous la Ve République*, 1987, pp. 246-8.
- 3) Jean-Francois Eck, *Histoire de l' économie française depuis 1945*, 1988, p. 49, F. Campell, *Le phénomène Le Pen ou la resurgance de l'extrême droite*, *Mémoire de DESS* (Paris), 1984, p. 19. 世論調査によれば、ミッテランを信任するとの回答は、1983年1月48%, 84年1月40%, 85年2月39%と減少し、逆に、不信任は47%, 56%, 59%と増えている。また、モーロワ首相への不信任も、82年2月40%, 83年3月53%と増加している。A and M. T. Lancelot, op. cit., pp. 83, 85, 87. FN 有権者において、反政府的感情は特に高く、例えば、85年県会選挙では、政府への反対意志を表明するために投票に臨んだ有権者が、国民平均で45%のところ、極右有権者では85%に達している。P. Perrineau, 'Le Front national-un électorat autoritaire' (以下un électorat autoritaireと略す), *Revue, politique et palre-mentaire*, no. 918. février 1987, p. 30.
- 4) 80年代の始め頃に、フランスで高まりつつあった移民排斥の雰囲気と、それが如何に政治に利用されていったかについてはフランソワーズ・ギヤスパール、クロード・セルバンテス＝シュレーベル著、林 信弘監訳『外国人労働者のフランス』（法律文化社、1989年）参照。
- 5) 第2回投票では27%がミッテランに、55%がジスカール・デスタンに投票している。Colette Ysmal, 'Le RPR et l'UDF face au Front national-concurrence et connivences' (以下 Le RPR et l'UDF と略す), *Revue politique et palrementaire* no. 86 (913), décembre 1984, p. 8.
- 6) Edwy Plenel et Alain Rollat, *L'effet Le Pen*, 1988, p. 130.
- 7) Jean Chatain, *Les affaires de M. Le Pen*, 1987, pp. 131-48.
- 8) Hugues Portelli, op. cit., p. 302, A. Rollat, *Les hommes de l'extrême droite-Le Pen, Ortiz et les autres*, 1985, p. 104.
- 9) 彼らは、FN の民衆的支持層を形成していた。そのような層とより「ブルジョワ的」な層が合流したことが、FN 票の膨張をもたらした。F. Matonti, *L'extrême droite*

en France depuis 1981, *Mémoire de science politique*, Université de Paris 1, 1984, pp.68, 131.

- 10) 政府への信任が低下しつつあったことは既述したが、そのことを越えて既成政党全体への不信がたかまりつつあった。例えば、「政治家は有権者の考えている事に関心を持っていない」と考える者は、1977年42%，79年48%，83年51%と急増している。また、1979年以降、既成政党への拒絶が高まり、投票の一貫性が低下している（73-8年59%→81-4年40%）。Martin A. Schain, 'The National Front in France and the Construction of Political Legitimacy', *West European Politics*, 10 (2), avril 1987, pp.232-3, id, 'Racial Politics: The Rise of the National Front', in Patrick McCarthy (ed.), *The French Socialists in power (1981-86)*, 1987, pp. 132-5.

- 11) C. Ysmal, *Le RPR et l'UDF.*, p.8, E. Plenel et A. Rollat, op. cit., pp. 70-1.

- 12) 84年ヨーロッパ議会選挙の組織外の候補は29名であった。その内訳は、

旧外交官	2	弁護士	2
ヨーロッパ議会議員	1	商人	1
企業重役	3	出版業	1
旧上・下院議員	2	企業の会計監査役	1
農業経営者	2	大学教員	2
演芸家	1	マーケティング・	
主婦	1	コンサルタント	1
教師	1	軍人	1
不動産業	1	attaché de direction	1
貿易業	1	地方議員	1
企業経営者	2		

と多彩な人材を取り込んでいる。Guy Birnbaum et Bastien François, 'Dirigent frontiste', in Nonna Mayer et Pascal Perrineau (dir.), *Le Front national à découvert*, 1989, pp. 99-101. FNのイメージ転換のために社会的地位や信望のある候補を擁立する戦略は、1984年ヨーロッパ議会選挙のリストにおいて初めて結実した。G. Birnbaum, 'Les stratégies du Front national' (以下 *Les stratégies* と略す), *Vingtième siècle*, no. 16. octobre-novembre 1987, pp. 32-3.

- 13) 特に、1985年に出版されたプログラム『フランスのために』では、「小さな政府」、私的イニシアティヴの尊重といった経済的自由主義の立場が鮮明に打ち出され、「真の自由主義革命」が唱導されている。Pour la France-programme du Front national, 1985, pp. 62-6. 統制経済の建設を唱える極右の伝統にあつて、そこにFNのユニークな点があつた。

- 14) SOFRES 調査によれば、RPR 支持者の49%，UDF 支持者の31%が地方レベルでのFNとの協力を望み、RPR 支持者の47%，UDF 支持者の28%が国民議会選挙での協力を望んでいる。C. Ysmal, *Demain la droite*, 1984, p. 234.

15) FN への入党者の波は、ドゥルーでの躍進から始まっているが、多くは保守から流入している。約 3 万名と言われている FN 党員のうち、6~7000 名は RPR からと見られている。また、多くの保守系の地方議員も加入し、FN の地方組織の幹部に迎えられている。Serge Dumont, Joseph Lorient et Karl Criton, *Le système Le Pen*, 1985, pp. 232-3. (詳細は第 2 章参照)

16) 右のブジャード運動の得票地図と 84 年の FN のそれを比べて見れば、両者の得票分布の違いは一目瞭然である。ブジャディスムとは異なり、FN は都市的・工業的フランスを基盤にして台頭していることが分かる。

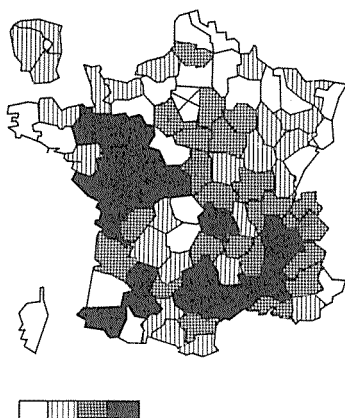
17) Pierre-Andre Taguieff, 'La doctrine du national populisme en France', *Études*, 364 (1), janvier 1986, p. 27.

18) マグレブ系の移民が多すぎるとい意見は、国民全体でも、1968 年 62%, 77 年 63%, 84 年 66% と増えている。M. A. Schain, op. cit, p. 238.

19) 左翼政府の積極財政政策は経済危機を悪化させ、失業率は、1984 年には、15-24 歳では 26% に達し (1881 年-15%), 1982 年には、インフレの悪化にたいして、賃金・価格の統制措置がとられている。フランの価値の低下、企業競争力の低下など、フランスの経済・社会は混迷の観を呈していた。Bela Blassa, 'Five Years of Socialist Economic Policy in France: A Valance Sheet', *The Toqueville Review*, 7, 1985-6. pp. 274-6.

20) IFOP は 1984 年の FN 有権者の調査から、5 つのクラスターにそれを分類している。1. 「外国人嫌い」-移民問題を最重要の動機で FN に投票したグループで FN 有権者の 38% を占め、中心的存在である。2. 「保守」-保守への批判ゆえに FN に票を投じた、忠誠度の低いグループ。FN 有権者の 28%。3. カトリック・ファンダメンタリスト-私学教育問題で穏健な立場をとる S・ウエーユが保守リストを率いていることに反発して FN 支持にまわったグループ。FN 有権者の 17.7%。4. 「青年労働者」-ルベンの人柄、強力なリーダー像にひかれて FN 支持にまわった労働者の出自を持つグループ。FN 有権者の 9%。5. 「左翼の放蕩息子」-過去の投票行動において左翼の支持者であったが、左翼政府への警告票として FN に投票したグループ。FN 支持者の 7.3%。以上の 5 つのクラスターのうち 4 と 5 が多くの労働者を含んでいる。Subrata Mitla, 'The National Front in France-A Single-Issue Movement?', *West European Politics*, 11 (2), 1988 pp. 58-60.

ブジャード運動+極右の得票地図
(1956 年国民議会選挙)



出典：N. Mayer et P. Perrineau (dir),
op. cit., p. 38

- 21) 1984年の時点で、失業者の15%、18～24才の青年の27%がFNを支持していた。Marie José Chambart de Lauwe, *Vigilance*, 1986, p. 19.
- 22) 1986年国民議会選挙でのパリの事例が典型であるが、84年にブルジョワ地区で大きく伸びたFNは、86年には富裕な地区で後退しており Nonna Mayer, 'Le vote FN de Passy à Barbès 1984-88' (以下 de Passy à Barbès と略す), in N. Mayer et P. Perrineau, op. cit., pp. 256-7, 有権者全体でも、86年には上級カードル・自由業で後退しており、1984年には比較的に富裕な層で「vote de sanction」が投じられたと考える。
- 23) そこが、FN有権者が「危機に見舞われた都市的・近代的フランスの生活難の表現」といわれる点であるが P. Perrineau, 'Les étapes d'une implantation électorale 1972-88' (以下 Les étapes と略す), in N. Mayer et P. Perrineau, op. cit., p. 44, FN有権者のオリジナリティが、移民と治安問題の優先にあるのは確かである。M. A. Schain, op. cit., p. 237. 例えば、グルノーブルでの調査(1985年)でも、「移民が失業の中心的要因の1つ」と考える者は、全体で26%、FN支持者では63%であった。また、犯罪の要因の1つと考える者も全体で51%、FN支持者100%である。移民の母国送還、フランス人と外国人の異なった待遇を求める者も、全体の3倍以上にも達している。P. Perrineau, 'L'écho politique et l'urbain', in *Esprit*, La France en politique, (以下 l'écho politique と略す), 1988, pp. 31-2. なお、既述のように、国民世論においても、マグレブ系移民の数が多すぎると考える者が、1968年62%、77年63%、84年66%と増えており、84年には、72%がその帰国を促進することを望んでいるなど、国民の中にも、FNの主張に感応する土壤があることが分かる。Paul Oliot, *Les immigrés mètèques ou citoyens ?*, 1985, p. 113.
- 24) M. A. Schain. op. cit., p. 235.
- 25) 保守の分裂、左翼政府に対する「なまぬるい」対応にいらだつ保守支持層の一部は、FNに投票することで、その失望と急進化を示した。Pascal Perrineau, 'Les ressorts du vote Le Pen' (以下 les ressorts と略す), *Le Figaro/Étude politique-L'élection présidentielle 1988*, 1988, p. 21, Frédéric Bon et Jean Paure Cheylan, *La France qui vote*, 1988, p. 257. そのような左翼に対する強硬な姿勢は、FN支持者において顕著で、その27%が、保守は合法的手段を越えて左翼と対抗すべきと考えていた M. A. Chain, op. cit., p. 247.
- 26) FNの支持者のそのような傾向は、一貫して持続している。SOFRESの調査(1983年9月-4年1月)でも、国家の権威尊重(FN支持者35%、全体21%)、国内の秩序回復(FN62%、全体37%)、同盟国のための参戦(FN56%、全体35%)、死刑の復活(FN88%、全体57%)に賛成しており、治安や権威にこだわる態度が鮮明に示されている。E. Plenel et A. Rolla, op. cit., p. 127. 1987年のl'Opservatoire intr-regionale du politique (OIP)による調査でも、FNの支持者の同様な特質が浮き彫りになっている。例えば、スト権、労働組合、示威運動の権利の廃止を深刻なことと思う者が、それぞれ29%、20%、35%と、他の政党支持者に比べて圧倒的に少ない

- ことや、死刑復活への支持、ホモセクシャルへの反感なども、FN 有権者の権威主義的性格を示している。Jean Ranger, *Le cercle de sympathisants*, in N. Mayer et P. Perrineau, op. cit., pp. 138, 146.
- 27) 墮胎の自由化が進歩であるかという設問に、FN 支持者の53%が肯定的に答えており、PRP 支持者40%、UDF 支持者34%と顕著な違いを示している。また、家族・労働・宗教の尊重も、保守支持者に比べて関心が低い(FN35%、RPR47%、UDF47%)。E. Plenel et A. Rollat, op. cit., p. 127. 社会構成、得票地図からも、FN 有権者が保守有権者と異なっていることは明らかだが、問題関心、イデオロギーの態度においても、そのことは該当する。
- 28) P. Perrineau. 'Quel avenir pour le Front national' (以下 *Quel avenir* と略す), *Intervention*, no. 15, mars 1986, pp. 34, 40, id., *Les étapes*, p. 45. 同選挙では、候補を立てた1460の選挙区に限ってみれば、平均得票率は、10.4%に達している。しかし、結局、1人が当選しただけであった。Howard Penniman (ed.), *France at the Polls 1981-1986, 1988*, p. 205.
- 29) ヨーロッパ議会選挙に比べて、FN の得票率8.85%は随分と落ち込んでいるが、県議会選挙では、地方の組織力が直接結果に反映されることによる。Hugues Pontelli, op. cit., p. 270.
- 30) Haward Penniman, op. cit., P. 210.
- 31) 国民の政治不信は、根強く続いていた。SOFRES 調査(1986)で回答者の42%が「フランスのデモクラシーがそんなにうまく、もしくは、全くうまく機能していない」と考えていたし、54%が諸制度もうまく機能していないと答えている。Piero Ignazi, 'Un nouvel acteur polibique', in N. Mayer et P. Perrineau, op. cit., p. 74. 当時の政治状況は、保守の復調、左翼の後退といった図式で単純に捉えられない。前記のような深い政治不信を背景に、左翼-保守の双方への批判的態度が広く有権者に浸透し、FN の既成政党批判も功を奏して、その無視しえぬ部分が FN 支持へと向かう傾向は持続していた。
- 32) Gallup L'Express 調査(1985年12月)で、回答者の17%が、86年の国民議会選挙での FN への投票を表明している。P. Perrineau, *Quel avenir*, p. 40.
- 33) S. Mitla, op. cit., p. 48.
- 34) A. Lancelot, *L'eurosanction, Projet*, septembre 1984, p. 868, S. Mitla, op. cit., p. 58, Julius W. Freind, *Seven Years in France-Fraçois Mitterrand and Unintended Revolution 1981-88, 1989*, pp. 126, 161. FN 有権者の26%が S. ヴェーユのリストに投票しなくなかったことを FN への投票理由に挙げている。SOFRES, *Opinion publique*, 1985, p. 181.
- 35) Jérôme. Jaffré, 'Front national : la relève protestataire', in Elisabeth Dupoirier et Gérard Grunberg, mars 1986 : la drôle de la défaite de la gauche, 1987, p. 222.
- 36) Ibid., p. 222.

- 37) Pierre Milza, *Fasisme en France*, 1987, p. 415.
- 38) P. Perrineau, *l'écho politique*, pp. 25-6.
- 39) Jean Vidard, 'Le dérangement marseillais', in N. Mayer et P. Perrineau, op. cit., pp. 314-5, F. Bon et J.-P. Cheylan, op. cit., pp. 261-4.
- 40) Ibid., pp. 269-70.
- 41) N. Mayer, op. cit., p. 256-7, Serge Etchebarne, 'FN dans le Nord ou les logiques d'un implantation électorale', in N. Mayer et P. Perrineau, op. cit., pp. 295-7.
- 42) Henri Rey et Jacques Roy, 'Quelques réflexion sur l'évolution électorale d'un département de la banlieue parisienne', *Hérodote*, no. 43, 1987, pp. 26-7.
- 43) Ibid., p. 27.
- 44) FNの台頭が、フランスの社会的・政治的統合の解体の兆候であり、鬱積した不満のはけ口となったという評価があるが N. Mayer et P. Perrineau, op. cit., pp. 344-7, Catherine Wihtol de Wenden, 'Du bon usage politique des immigrés', *Projet*, no. 191, 1985, pp. 47, FNの成功は、過去10年間に及ぶ危機にいらだち、スケープ・ゴーツ（国家・移民。犯罪者・少数派……）を求めている多くのフランス人の恨みと反抗を政治的に結晶させたことによるものであり、危機の文脈において、恨みと恐怖の蓄積が進む都市領域での「都市の行き詰まり」を背景にしていた。P. Perrineau, *Quel avenir*, pp. 36-9. この都市での危機の諸影響の重合と、従来あった都市コミュニティの解体によって M.-J. Ch. de Lauwe, op. cit., p. 20, FNにとって極めて有利な土壌が形成される。都市部においても、そのアノミーを改善する努力が地方自治体やアソシエーションによって取り組まれている所では、FNの浸透に抵抗している。P. Perrineau, *l'écho politique*, p. 37.
- 45) P. Ignazi, op. cit., pp. 73-4, René Rémond, 'The Right as Opposition and Future Majority', in G. Ross, S. Hoffmann and S. Malzacher, op. cit., p. 137, P. Perrineau, *l'écho politique*, p. 26.
- 46) 86年のFN票37%は、新たにもたらされたものであったが、新たなFN支持者は、より若く、民衆的で、低学歴化し、脱党派的、脱宗教化し、労働者と失業者の割合が高いと言う特性を呈している。N. Mayer, op. cit., p. 262. M. A. Schain, op. cit., p. 243, J. Jaffré, op. cit., pp. 223-7.
- 47) P. Perrineau, 'Le Front national: un électorat de la crainte', *CFDT aujourd'hui*, no. 88, février 1988, p. 31. FN支持者は、他党の有権者に比べて、ベシミスティックな態度が顕著である。85年3月の調査（Bull-BVA）によると、フランスと自分の家庭が益々悪くなっていくと考えている選挙民は、国民全体で43%だが、極右の支持者では72%にも達している。P. Perrineau, *un électorat autoritaire*, p. 31.
- 48) A. Duhamel, *Les habits neufs de la politique*, 1988, p. 65.
- 49) FNは、137議席を獲得し、5つの地域圏議会では、キャスティング・ボードを握る地位を得ている。Howard Penniman, op. cit., pp. 224-5.

- 50) 特に、シラクの不振は顕著であった。第一回投票でシラクは19.9%しか獲得しえなかった。ゴースムは、70年代中葉以降、後退を見せるが、シラクは、保守陣営での優位性の再建に、結局失敗してしまう。それは、バールとの競合によってジスカールの中道票を奪われたことや、左翼にかわる魅力的な政策・理念を選挙民に提示しえなかったことにもよるが、保守の右派有権者がFNに流れたことも、シラクの敗北に大きく寄与している。C. Ysmal, Barré : 'la persistance du tempérament centriste', in *Le Figaro/Études politique-L'élection présidentielle 1988*, 1988, p. 17, P. Perrineau, 'Le Front national et les élections-l'exception présidentielle et la règle législative' (以下 l'exception présidentielle と略す), *Revue politique et parlementaire*, no. 396, juillet-août 1988, p. 38.
- 51) Ibid., p. 34.
- 52) James G. Shields, 'Campaigning from the Fringe Jean Marie Le Pen', in John Gaffney (ed.), *The French Presidential Elections of 1988*, 1989, p. 142.
- 53) *Le Monde, Dossiers et Documents-l'élection présidentielle*, 1988, p. 44.
- 54) P. Perrineau. *Les ressorts*, p. 21.
- 55) Jean Charlot, 'Le séisme du 8 mai et la nouvelle donne politique', *Figaro/Études politiques-L'élection présidentielle*, p. 28.
- 56) P. Perrineau, *l'exception présidentielle*, p. 35.
- 57) 農村部での伸長は、反エタティスム・反税金といったテーマへの共鳴というブジャーダ運動と同じ側面と、東部諸県においては EC 統合への不安を背景に、今やそれに積極的な姿勢を取るゴースムによって放棄されたナショナリズム的心情をFNが回収した結果と説明されている。P. Perrineau, *Les ressorts* p. 20, id., *l'exception présidentielle*, p. 38, F. Furet, J. Juillard et P. Rosanvallon, *La République de centre*, 1988, p. 122.
- 58) P. Perrineau, *l'exception présidentielle*, p. 36.
- 59) J. G. Shields, op. cit., p. 144.
- 60) P. Perrineau, *l'exception présidentielle*, pp. 36-7.
- 61) 土倉完爾「ミッテランの再選—フランス1988年選挙」, 日本選挙学会年報『選挙研究』第4号(1989年3月), 34頁。
- 62) FN の得票のパターンは、84年ヨーロッパ議会選挙, 86年国民議会選挙, 88年大統領選挙, 同年国民議会選挙と増減を繰り返している。84年ヨーロッパ議会選挙, 88年大統領選挙は、国民議会選挙と違って政党・候補への人気投票の要素が強く、地方での諸利害・影響力が直接作用することはない。その場合、FN は予想以上の票を集めているが、国民議会選挙では、86年は比例代表で行なわれ、35名の当選者を出しているが、88年には2回投票多数代表制で行なわれ1名しか当選していない。やはり、FN は地方の利害や諸政党の競合関係が直接絡んでくる国民議会選挙では、保守有権者が「有効投票」への配慮から RPR・UDF に復帰することもある、どうしても得票を減らしてしまう。FN の各選挙での票の増減は、その選挙の性質によ

で判断すべきで、単純に特定の選挙の結果で、FNの「衰退」と即断すべきではない。

63) P. Perrineau, *Les étapes*, p. 53.

64) 1986年にFNから当選した12名の組織外候補は、地方名望家、高級官僚、弁護士、医師、大学教員などの多彩な職業を持ち、既にCNIPやRPRで政治経験を持つ、極右の伝統的イメージとは違う者たちであった。G. Birnbaum et B. Francois, 'Unité et diversité des diligentes', in N. Mayer et P. Perrineau, op. cit., pp. 87-92, 102-3. ただし、それらの候補が、FNのイメージ・アップに貢献したとしても、実際の得票拡大にはそれほど役だててはいない。彼らは平均12.9%の得票であったが、旧くからのメンバーである候補たちは12.5%と、さほど変わらない。要するに、FN有権者は、候補よりも、党のイメージやルペンとその主張で投票していたのである。J. Jaffré, op. cit., p. 220.

65) P. Perrineau, *Les étapes*, p. 53.

66) Ibid., p. 54.

67) N. Mayer, op. cit., p. 263.

2. 既成諸政党とFN

80年代までは、左右両翼の政党が、政治生活をほぼ独占的に支配してきた。極右勢力は、戦後ずっとマージナルの存在に甘んじてきた¹⁾。極右勢力の存在が、他の政治勢力の脅威となるのは、アルジェリア放棄反対闘争のように、議会外の実力闘争によってであった。選挙を通じての政党システムへの挑戦は、ブジャード運動やティクシエ・ヴィニャンクルの大統領選挙への挑戦といった、比較的成功した試みを除いて、惨敗を喫して来た²⁾。

FNも、72年10月に結成されて以来、83年の一連の選挙における躍進までは低迷を続け、政治的ゲッターを脱出できなかった³⁾。それが、10%内外の票を獲得し始めたわけであるから、フランスの政治生活に影響を及ぼしたことは当然であった。本章では、FNの躍進と定着にとって非常に重要な要素であった、保守有権者・党員・指導者の動向を中心に扱うことによって、FNの存在が、フランスの政党システムに与えている影響を検証してみたい。

1984年のヨーロッパ議会選挙において、従来まだ保守に投票してきた有権者が、大量にFNに流れたことは、既に確認した。保守統一リストが、S・ヴェーユによって率いられていることへの反感が作用していたことは既述した

が、それだけが、保守支持層の一部が FN に移行した要因ではなかった。より根本的には、保守の現状に対する不満が支持者の一部にくすぶっていたこと、そして、FN の側に、彼らの移行を実現する魅力が備わっていたこと、彼らの間に共通の政策・価値感が存在していたことが重要であった。

さて、保守支持層の不満であるが、それは、保守内部での指導者間の対立や、左翼に対して魅力のあるオールタナティブを提起しえないことへのいらだちが背景にあった。彼らは、左翼政権の存在を前に、急進化を示す。1984 年にグルノーブルで開かれた RRP の党大会での、出席した代議員への調査によれば、自身を中道左派と見る者は、1978 年の 30% から 2% へと激減している。そして、中道と自己を分類する者も激減し、代わって中道右派・右翼と応える者が大幅に増えている⁴⁾。このような、「先進リベラリズム」を唱えるジスカール路線が支配する、70 年代の改革指向でリベラルな保守路線への失望から、急進的で強硬な路線を支持する傾向が保守勢力の中で顕著になってくる⁵⁾。

FN の保守切り崩しの戦略は、一方で、移民・治安・失業・重税などの諸問題はジスカール・デスタン大統領時代の遺産であり、左翼政権はそれを悪化させたけれども、フランスの直面している苦境に関して「保守も国のデカダンスに大きな責任を追っている」と、保守への攻撃を展開し⁶⁾、他方で、保守とのイデオロギー的距離を接近させることで、その急進的部分の取り込みを図り、彼らに協力を迫ることにあった。

FN と保守の「共謀」⁷⁾は、1983 年の市町村選挙で顕著になった。保守は、治安悪化、移民問題のテーマを選挙キャンペーンで展開し、そのようなテーマが政治的争点として定着することに加担し、結果として、FN の台頭を助けることになってしまった⁸⁾。即ち、同年 9 月ドゥルーでの市議会補選の第 2 回投票で、保守側は FN と提携し、左翼に勝利した。そうした選挙での提携の背景には、保守と FN との間にイデオロギー的接近が明らかになってくる。特に、移民問題が、FN のディスカールの保守への浸透を可能にするテーマとして作用する。

フランスで、反移民的動向が、表面化し始めるのは 80 年代に入ってからのことである。勿論、その背景には、長引く経済不況が横たわっていたのだが、

既述のように世論の中に移民の存在への嫌悪が高まってくる。例えば、SOFRES による調査(1984年1～2月)でも、「移民と帰化者の数が多すぎる」という回答が58%に達し、「大部分の移民が、その諸要求と諸活動によってフランスを政治的に不安定化させようとしている」と18%が考え、帰化はフランス市民になるには不十分だと17%が考えている⁹⁾。

保守の政治家の中からも、そのような世論を反映して、反移民的ディスクールが横溢してくる。83年の市町村選挙時に、トゥーロンで、モーリス・アレックス Mourice Arreckx (UDF) は、トゥーロンが「ヨーロッパのごみだめになるのを拒否しなければならない」と発言し、トゥルコワンでは、アンドレ・ディリジャン Andre Diligent は「左翼がフランスに送り込んだ危険な外国人」といったテーマを巡って、移民に言及している¹⁰⁾。また、パリ20区でもある保守指導者は、「20区は、移民人口に関して許容の限界を越えている。社共政府は、国境のコントロールをもちやなさず、移民の地位を合法化することで、非合法移民に奨励を与えている。そのような事態を拒むことは、人種主義の証明ではなく、勇気の証明である」と、反移民の立場を正当化している¹¹⁾。

RPR のリーダーである J・シラクも、「リベラシオン」紙上(1984年10月30日)に同様の発言をしている。彼は「当然、もし移民がより少なければ、失業はより少ないだろうし、若干の都市や街区では、緊張がより少ないであろう」と、FN の移民-失業-治安悪化というテーゼを追認している。また、「南の人間の脅威」についても触れ、伝統的に多産な家族による、白人でキリスト教のヨーロッパへの近い将来の侵入という、FN の強迫観念を共有していることを露呈した¹²⁾。ヨーロッパと「南」の間における人口不均衡のテーマは、FN が、フランス人と外国人との人口差からくる危険性について発言し出してから、RPR も同様の主張を始めている¹³⁾。

FN のイデオロギー上の接近は、他にも観察しうる。保守の一部は、フランス社会とその守るべき諸価値についての、極度に保守的な見解に傾斜していた。例えばRPRは、妊娠中絶に反対し、家族の擁護、出産の奨励を唱えると同時に、フランスの伝統的諸価値を積極的に擁護している¹⁴⁾。FN も国家の第一の文化的使命は、フランスの記憶であると位置づけ、フランスの国語、文化、遺

産、伝統（道徳も含めて）、景観、自然の防衛・発展を主張している¹⁵⁾。

また、治安の悪化の責任を、左翼政府の政策（司法の寛容さ、警察力行使のなまぬるさ）に帰し、弾圧機構の強化、死刑の復活を求める点でも、両者は足並みを揃えている¹⁶⁾。

最後に、FN と保守は、レーガンやサッチャー流のネオ・リベラリズムへの傾斜でも軌をいつにしている。特に、RPR は、プランニングや国有化によるディリジスム路線を転換して、福祉国家・国家介入の否定、プランニングの否定、民営化の推進、減税の実施、企業経営の自由・解雇の自由、労働運動の抑制などネオ・リベラリズムへの傾斜を鮮明にした¹⁷⁾。81年に政権に着いた左翼政府の国有化・私学補助金・出版規制・共産党の入閣などの政策に直面して、保守側はリベラリズムの立場から、「自由の擁護者」としてのイメージを前面にだしたのだが¹⁸⁾、そのような姿勢は、基本的に FN の政策的提言とも一致するものであった¹⁹⁾。

結局、ルペンは、自らの党イメージとして、左翼の躍進と社会的諸問題によって「急進化した」右翼、レーガン、サッチャー流の保守に連なる党として押し出し、FN を保守と同じであるが、より原則に忠実な党として印象づけることをねらっていた²⁰⁾。

さて、保守と FN のイデオロギー的接近を見たが、保守の支持者レベルでも FN への接近が表面化する。SOFFRES 調査（1983年10月）によると、FN との地方レベルでの協力に賛成の者は、RPR の支持者で49%、UDF の支持者で31%に達し、国民議会での協力を認める者も、RPR 支持者で47%、UDF 支持者で28%を占めている。また、FN と保守が共に統治することまでも認める者も、RPR 支持者で49%、UDF 支持者で33%もいた²¹⁾。また、1984年の時点では、RPR 支持者の46%、UDF 支持者の37%が、ルペンの人物とその思想への共感を表明していた²²⁾。他の調査でも、極右は、フランスの民主主義にとって危険ではないと考える者が、RPR 支持者で64%～9%、UDF 支持者で55～8%に達しており²³⁾、FN の政党システムへの参入を認める世論が多数を占めている。

保守の指導者レベルでも、ドゥルーでの FN との協力を巡って、意見の対立が表面化していく。J・シラクは、ドゥルー以外での協力の可能性を否定

せず、「4名のドゥルーでのFNメンバーは、4名の共産党閣僚より深刻なものではない」というレイモン・アロンの言葉を引いて、協力を容認する姿勢を示した²⁴⁾。アミラル・ヴィヴィアン Amiral Vivien (RPR) も、「大切なのは、左翼を倒すことである」と、左翼主敵論を展開している²⁵⁾。UDFはRPRに比べて協力に消極的であったが、F・レオタール（共和党党首）、ジャン・ゴードン（UDF国民議会議員団長）のように協力を容認する動きもあった²⁶⁾。

他方、UDFの中でも、S. ヴェイルと「社会民主中道派(CDS)」は、FNとの協力に批判的だった。また、パールのように、立場を鮮明にしない者もいた。このように、保守の指導的人物のなかでは、少なくとも、1983-4年の時点では、協力を明示的もしくは暗黙に許容する意見が優位を占めていた²⁷⁾。以降、86年国民議会選挙では、FN抜きで多数派を獲得できる見通しから、FNに対する保守側の態度は硬化するが、1988年の時点でも、Ch. パスカのように、FNとの協力に賛成する考えと、ミッシェル・ノワール Michel Noire(前貿易相)のように反対する見解に分かれている²⁸⁾。FNとの協力を拒む中央指導部と、実際の選挙戦の必要からFNとの協力を望む下部の間には不一致が存在し、保守の信頼性にダメージを与えている²⁹⁾。

以上のような支持者レベルでのFN受容の動きと、指導者レベルでのFNへの協力を巡る見解の相違に見られるように、FNの存在は、保守にとって、恒常的プレッシャーを与えるものだった。勿論、保守にとって最も深刻な問題は、彼らの組織と支持層の切り崩しであった。FNの有力な諸支部は、1983年冬から翌年にかけて結成されているが、その原動力になったのは、保守への失望者であり、その最も活動的なミリタン層であった³⁰⁾。

例えば、パリ20区のUDFを構成する一党派である共和党の活動家たちは、「左翼にたいして、あまりに一貫性がなく不明快である」保守の態度を批判して、60名のメンバーがFNへと移っていった³¹⁾。そのような動きは、モルビアンの国民議会補欠選挙でのルペンの健闘の後に加速されるが、特に、地中海地方では顕著に現われる。ラングドックでは、モンペリエで、FNの地方指導者の働きかけによって、保守側からの結集が進み、セト Sète 市では、RPRの活動家15名の加入によって支部ができつつあったし、トゥールーズでは、

元 RPR の県指導者が、RPR の260名程の活動家を伴って FN に合流している。他にも、ヴァール Var 県のドラギニャン Draguignan では共和党から、ヴォクリューズ Vaucluse 県のアヴィニオン Avignon, リル-シュール-ソルグ L'Isle-sur-Sorgue では RPR からのメンバーの流入が生じている³²⁾。

保守側から活動家が FN に移るのは、保守の指導者のディスクールよりも、ルペンのそれの方が、彼らにとっては、左翼と戦う必要性に合致していると思われたからであった³³⁾。とりわけ、RPR と CNIP の活動家が、FN 活動家の供給源になっていた。RPR の余りに合法主義的で議会主義的体質に嫌気がさした RPR 活動家と、極右の旧活動家の避難所の観のある CNIP の活動家は、FN のより強硬な姿勢に魅せられて参加してきたのだった³⁴⁾。

また、下部の活動家だけではなく、保守の名望家たちも FN に加わっている。例えば、パスカル・アリギ Pascal Arrighi, フェデリック・ドマンク Frédéric Domenech, エドゥアール-フェデリック・デュボン Edouard-Fédéric Dupont らの旧保守代議士が FN リストから国民議会に立候補しているし、RPR のブルーノ・ショヴィエール Bruno Chauvière (ノール県), ジョルジュ・ド・コルノワ Georges de Cornois (オワーズ県), UDF のジャン・ルッセル Jean Roussel (ブッシュ・デュ・ローヌ県) らもそれぞれ1986年国民議会選挙, 地域圏議会選挙に FN から立候補しており, 他に, M. ピニョール Pingault (RPR のトゥールーズ指導者), M. プラス Place (RPR のロワール県執行委員会メンバー) らが FN に加わっている。また, 社会的・経済的名望家たち, 例えば, フランソワ・バシユロ François Bachelot (セーヌ・サン・ドニ自由業会議所事務総長), ピエール・デカブ Pierre Descaves (オワーズ県 SNPMI 副組合長) ジャック・ヴェス-タンベ Jacques Vaysse-Tempé (北アフリカ引き揚げフランス人結集運動 Rassemblement des Français repatriés d'Afrique du Nord 総裁), ブルーノ・メグレ Bruno Megret (イゼール県共和主義行動委員会) らを取り込んでいる³⁵⁾

FN はスティルボフの指揮下に党の「名望家 Notabilisation に取り組むが³⁶⁾, 1984年, 86年と, 保守的名望家が FN リストに多く含まれ, その狙いは一定の成功を収めた。長年に渡りマージナルな位置に追いやられ, 急進的で暴力的な言動を特徴としてきた極右のイメージ転換を図るためには, 「名望

家」戦略は起死回生の策であったが、彼ら名望家の存在が、FN に穏健で責任ある政治勢力であるとの外観を与え、保守有権者の支持調達を可能にし、政党システムに参入・定着するうえで果たした役割は大きなものであった。

それでは、次に FN の躍進によって、保守が如何に選挙において影響を受けているかを具体的に見ておこう。既に触れたが、84年のヨーロッパ議会選挙において、FN の躍進は、保守からその支持層を大幅に奪っていた。

だが保守にとって深刻なのは、2回投票多数代表制によって争われる国民議会選挙や大統領選挙などの場合であった。即ち、左右両翼の力くらべになると、第2回投票で、FN の票の行方が勝利の鍵を握る場合が出てくる。そこから、保守のディレンマが出てくる。即ち、FN 票欲しさに協力を結べば、左翼の側いから「ファシストと手を握っている」といった攻撃を浴び、中道票が逃げるし、協力を拒めば FN 票を失い、左翼に負けてしまうというダブルバインドの状態に追い込まれてしまう³⁷⁾。特に保守の盟主として保守陣営を統一し、次の大統領選挙での勝利を目指していたシラクにとって、FN 票の行方は重要な意味をもっていた。

県別比例代表制で行なわれた1986年国民議会選挙では、「有効投票」の配慮も働いて、1984年ヨーロッパ議会選挙で FN に流れた保守有権者が還流してきた。しかし、保守系の候補が競い合い、しかも、候補者個人の人気投票的要素の強い大統領選挙で「有効投票」の論理が作用するかは疑問であった。特に、大統領選挙の場合、第1回投票での得票は、第2回投票に大きな影響を与える。保守票の分裂に加えて、FN への票の分散は、シラクにとって最悪の結果を予想させるものであった。

果たして、88年大統領選挙は、シラクにとって最悪の結果となった³⁸⁾。第1回投票は、シラク19.94%、バール16.54%、ルペン14.39%と分散し、右翼陣営の票は3分されてしまった。シラクは、第2回投票で、バールに流れた中道票を取り込み、FN 票も結集するという難題を背負い込む事になったが、決戦投票では、ミッテラン54.02%、シラク45.98%と、大統領選挙としては1969年以来の大差をつけられて敗北してしまった。

その敗北の大きな要因が、FN 票にあったことは、表11から、保守票が後退しているほど FN 票がのびていることから確認しうるし、また、表12から

表11 FNの得票と左翼・保守票
(1988年大統領選挙)

FNの増加	左 翼	保 守
4 %以上	+3.5	-2.3
4 - 6	+2.8	-2.8
6 %以上	+2.0	-7.2

出典：N. Mayer et P. Perrineau(dir.), op. cit., p. 340

表12 ルペン票とシラク・バール票
(1988年大統領選挙)

ルペン	シラク	バール
10%以下	22.5%	17.5%
10-4 %	20.3	16.2
14-6 %	19.7	16.7
16%以上	17.6	16.0

Figaro, Études et Documentations, p. 16.

も、第1回投票でFNの得票率が高いほど、第2回でのシラク票は伸びていないことにも示されている。FNが14%以上とっている場合、シラク票は第2回で4.6%も減っており、明らかに、ルペン有権者の無視しえぬ部分が、第2回でシラクを見捨てていた³⁹⁾。

また、大統領選挙でFNに流入した新有権者をみても、その半分は86年のRPR・UDF有権者であり、彼らは、保守の大統領候補の乱立に嫌気がさし、シラク内閣の2年間の政治に抗議する意図からもFNに票を投じたのだった⁴⁰⁾。

以上のように、大統領選挙というフランスの政治生活で最も重要な選挙で、FNの存在は、保守から有権者を奪い、その権力奪還にとって大きな障害となったのだった。

そのようなFNの保守切り崩し対して、当然、保守側からは、FNに対抗する動きが出てくる。既述のような保守のディスクールとFNのそれとの接近も、FNの影響力の浸透に対抗するという保守側の意図も含まれていた。FNとの強硬な態度のせり上げによって、FNに魅了されている支持者の回収を図るのだった⁴¹⁾。また、シラクのディスクールにおけるド・ゴールへの言及の増加も、FN対策の意味を持っていた。彼は、1984年RPRのグルノーブル大会で、「われわれの伝統において(ゴリスムは)われわれのオリジナリティを形成してきた」と予定になかった発言を挿入し、ド・ゴールの伝統を聴衆に想起させたが、その狙いは、活動家たちに、ルペンはゴリスムとド・ゴールの敵であり、ルペンに従うことはゴリスムの運動を裏切り、自分自身を否定するということを喚起することにあった⁴²⁾、そして、保守とFNの違いを可能な限り鮮明にしようと努力するなど⁴³⁾、イデオロギー面でも保守陣営の動揺を押さえに掛かったのだった。また、85年のUDF・RPR共同統治プログラムの作成も、FNを明示的に排除する意図を含んでいた⁴⁴⁾、同年の県議会

選挙前には、RPR が、極右との地方レベルも含めた協力の禁止を公式に打ち出している⁴⁵⁾。

他にも、CNIP (「自営・農民全国センター」) をめぐって、FN と保守の間での争奪戦も展開された。CNIP は保守と極右間の橋渡し役を果たしていた党派であるが、その内部では、FN に対する姿勢で3つのグループに分れていた。即ち、FN に敵対するグループ、FN との接近に賛成するグループ、FN との接近にためらうグループであった⁴⁶⁾。勿論、保守側としては、CNIP の第2グループを弱体化させることに工作の力点を置いた。そのために、FN 支持派の中心的人物であるミッシェル・ジュノ Michel Junot を、86年国民議会選挙でウール-エ-ロワール Eure-et-Loire 県の保守リストのトップに据えることで懐柔し、FN 支持グループを切り崩した。また、CNIP 内部の FN 離反組を支援して、FN との接近を妨害させた⁴⁷⁾。結局、保守側の画策は成功し、CNIP は、86年国民議会選挙の際に、保守との協力を選択するのだった⁴⁸⁾。

FN は、そのような保守側の排除の姿勢に対して態度を硬化させて行き、1989年3月の市町村選挙では、第2回投票で、たとえ左翼が勝利する可能性があろうと、保守への協力はしないという方針を打ち出した。今回、FN は、住民9000人以上のコミュンで10.2%を獲得し、1983年に比べて大幅に得票を伸ばしているが、それに対して、保守は、44.5%に終わり、83年に比べて9.7%後退している⁴⁹⁾。両者の得票率の増減からも、FN の存在が保守票を大幅に食っていることが推測されるが、第2回投票の結果を見れば、そのことはより明らかになる。表13は3万人以上の都市で、2回投票に FN が候

表13 1989年市町村選挙第2回投票でFNが候補を維持した場合の他の政治勢力の得票率増減(3万人以上の都市)

	第一回投票	第二回投票	増 減
左 翼	41.8	44.4	+2.0
エコロジスト	4.5	1.3	-3.2
保 守	38.1	38.9	+0.5
F N	15.6	15.1	-0.5

第2回投票でFNが候補を維持しなかった場合

	第一回投票	第二回投票	増 減
左 翼	44.1	47.1	+3.0
エコロジスト	4.9	3.0	-1.9
保 守	43.9	49.9	+6.0
F N	7.1	—	—

出典：P. Perrineau, Les clefs de la défaite, Revue politique et parlementaire, no 940, mars-avril 1989, p. 23.

表14 パ・ド・カレ県炭坑地帯のコミューンにおける共産党票と
FN票 (%)

1981年大統領選挙での マルシェ票	コミューン数	FN (1984)	FN (1986)	増減
20%以上	7	4.9	8.8	179.6
35—40%	20	6.1	8.7	142.6
30—35%	13	6.1	8.7	142.6
25—30%	23	6.8	9.3	136.8
25%以下	13	7.2	8.4	116.7
炭坑地帯全体	76	6.4	8.9	139.0

出典：E. Dupoirier et G. Grunberg (dir.), op. cit., p. 228.

補を維持した場合とそうでない場合の、他の陣営の得票率比較したものである。FN が第2回に参加しなかった場合、保守は、0.8%得票を伸ばしているが、他方、FN が参加した場合は、保守は6%も得票が減っている。左翼は、それぞれ+2.6と+3%と、ほとんど影響を受けていない。以上のことから、政党間競争にFN が加わった結果、保守側に大きな打撃を与えていることが分かる。

さて、次に、左翼の側にも少し触れておけば、彼らも、保守ほどではないが、FN によって支持者を奪われていることは確かである。例えば、84年のヨーロッパ議会選挙では、FN 有権者のうち27%が、81年の大統領選挙第2回投票ではミッテランに投票していたし⁵⁰⁾、88年大統領選挙でFN に新たに投票した有権者の18%は、1984年には左翼に投票していた⁵¹⁾。

左翼に関して、よく問題にされるのは、社会党よりも、退潮著しい共産党とFN 票との関係であった。共産党から離れた票が、FN に流れ込んで入るといふ推論である。各選挙の結果から、1984年には、殆ど旧共産党票はFN の躍進に貢献していないが(1981年の共産党有権者の1.5%)⁵²⁾、86-8年には、共産党の地盤でFN が支持を伸ばす現象が出てくる。例えば、86年のパードーカレ県の炭鉱地帯でのFN票は、共産党の強さと明らかに反比例している(表14)。また、マルセイユでも、共産党の地盤である北部の港湾地区で、86年国民議会選挙、88年大統領選挙と健闘し⁵³⁾、共産党の強いセーヌ・サン・ドニ県でも、84年には共産党からFN へという票の流れの仮説は成立しない

が、86年には、共産党の伝統的地盤で票を伸ばしている⁵⁴⁾。

87年に実施された調査によれば、FNの支持者は、制度や社会的・政治的要素への不信が強く、急進的異議申し立てを表現している点で、共産党の支持者に近いと指摘されている⁵⁵⁾。

それらの事実から、84年以降、共産党を離れた支持者の一部が、FNに移行し、その民衆的支持層を形成していると結論づけうるし⁵⁶⁾、従来、工業化・都市化された地域で共産党が果たしていた既成政治への異議申し立ての機能が、今やFNによって担われていると解釈しえよう⁵⁷⁾。

さて、81年以前のジスカール・デスタンの統治は、フランスの直面する危機的状況に対する保守の問題解決能力の欠如を露呈し、ミッテラン政権の初期の諸改革は、事態を悪化に向かわせた。既成諸政党への国民の不信は高まり、そのような信頼の空白に乗じて、FNは左右両翼、とりわけ、保守に飽き足りない支持層を吸収して、極右政党としては⁵⁸⁾未曾有の発展を見せた。コンスタンスに10%内外の得票を上げるFNの存在は、従来まで、フランスの政治生活を支配してきた4党システムの枠組を揺るがす効果を与えている。とりわけFNの存在は、保守に重くのしかかっている。左翼支配に対する説得力あるオールタナティブとして国民に受けいれられないのは、保守に固有の問題が有るのは確かであるが、FN票を加えない限り、左翼に勝利できないという困難な事態に保守を追い込んでいるFNの存在を無視しえない。と言って、部分的にでもFNと協力に踏みきれば、88年国民議会選挙のブッシュ・エ・ローヌ県での場合のように、左翼側からの保守攻撃の材料として使われる⁵⁹⁾。今や、共産党が凋落し、左からの侵蝕への心配から相対的に解放されて、国民政党的な支持構造を築きつつある社会党に比べて、右翼の有権者をRPR・UDF・FNの間で争奪せねば成らない保守は、明らかに不利である。特に、大統領の座を伺うシラクにとって、常に遠心力を働かせる中道勢力と、右への求心力を働かすFNを糾合して左翼と対決することは、極めて困難な課題である。

- 1) フランス極右の戦後の歴史については、以下の文献を参照。A. C. d'Appollonia, *L'extrême-droite en France-De Maurras à Le Pen*, 1988, Jean-Christian Petit-fils, *L'extrême droite en France*, 1988, François Duprat, *Les mouvements d'*

extrême droite en France depuis 1944, 1972.

- 2) プジャード運動は、56年国民議会選挙で25万票（得票率11.5%）を獲得し、65年大統領選挙でヴィニヤンクールが5.20%を集めている。中木康夫『フランス政治史中』（未来社、1985年）、270頁、A. C. d'Appolonia, op. cit., pp. 294, 289.
- 3) FNの結成から1983年までの「停滞期」については、前出拙稿、34-42頁参照。
- 4) Pierre Brechon, Jacques Derville et Patrick Lecomte, 'L'univers idéologique des cadres RPR', *Revue française de science politique*, 37, octobre 1987, pp. 683-4. 保守党外で諸クラブが、活動を強化するの、保守勢力の急進化の1つの現象で、それらは、新たな活動家層を組織し、左翼に対抗しうるイデオロギーを打ち出し、RPR・UDFの敗北によるアパシーから生じた空隙を埋める役割を果たした。J. Lorient, K. Criton et S. Dumont, op., cit, p. 171. 「共和主義行動委員会 le Comité d'Action Républicain」, 「クラブ89」, 「連帯と自由協会 l'Association Solidarité et Liberté」, 「GRECE」, 「クラブ・ド・ロルロージュ le Clube de l'Horloge」などが代表的な保守系のクラブであるが、とくに、「新右翼」と呼ばれる「GRECE」「クラブ・ド・ロルロージュ」が、FNとのイデオロギー的近親性によって注目すべき存在であったし、「クラブ・ド・ロルロージュ」のナンバーワン J-Y. ガルーがFNに加入して綱領起草に携わるなど、人的にも交流があった。M-J. C. de Lauwe, op., cit, p. 31. なお、「新右翼」については別稿を予定しているが、とりあえずは、以下の文献を参照。A. Rollat, op. cit. pp., 145-6, cf. P. A. Taguieff, 'Les droite radicale en France', *Les Temps Moderne*, no. 465, avril 1985, Anne-Marie Duraton-Crabol, 'La Nouvelle droite entre printemps et automne 1968-1986', *Vingtième siècle*, janvier-mars 1988.
- 5) 保守がその立場を急進化させていたことは、彼らが、それまで避けていた「右翼 droite」という呼称を名乗るようになったことに象徴的にも表れている。Camille Granot, 'La droite française aujourd'hui', *Raison présente*, 1988, pp. 6-7.
- 6) S. Dumont, J. Lorient et K. Criton, *Le système Le Pen*, 1985., pp. 179-80.
- 7) C. Ysmal, *Le RPR et L'UDF*, p. 20. そこでイスマルは、イデオロギーの領域では、FNとRPR・UDFの間に《collusion=共犯》が存在し、FNの主張が普及するうえで、保守の貢献があったと指摘している。
- 8) H. Portelli, op. cit., pp. 249, 277, E. Plenel et A. Rollat, op. cit., pp 60-1.
- 9) H. Portelli, op cit., pp. 210-11.
- 10) J. Chatain, op. cit., p. 16.
- 11) J. Lorient, K. Criton et S. Dumont, op., cit. pp. 181-2.
- 12) C. Ysmal, 'Un colosse aux pieds d'agile : Le RPR'（以下 Le RPR と略す）, *Les Temps moderne*, no. 465, avril 1985, p. 1888.
- 13) C. Ysmal, *Le RPR et l'UDF*, p. 19.
- 14) C. Ysmal, *Le RPR*, p. 1890.
- 15) cf. *Pour la France*, pp. 123-39, 161-77.

- 16) C. Ysmal, *Le RPR et l'UDF*, p. 16-8. 保守の側は、左翼に傾いた有権者を、および彼らに引き戻すため、治安や自由、学校問題を前面に立てて激しい左翼政府批判を展開したが、Désire Calderon, *La droite française-formation et projet*, 1985, p. 128, そのディスクールは、FN のそれと近似したものであった。
- 17) C. Ysmal, *Le RPR*, pp. 1889-1, D. Calderon, *op. cit.*, pp. 139-43, 203.
- 18) R. Rémond, *op. cit.*, p. 132-4.
- 19) M-J. Ch. de Lauwe, *op. cit.*, p. 136.
- 20) Monica Charlot, 'L'émergence du Front national', *Revue française de science politique*, février 1986, p. 39.
- 21) C. Ysmal, *Demain la droite*, p. 234.
- 22) M. A. Schain, *op. cit.*, p. 236. FN の有権者と RPR・UDF の有権者の違いは、本質的なものというより、程度の差にしか過ぎず、両者のイデオロギー的距離が接近していた。Ariane Chebel, *La culture politique du Front national : présentation de l'évolution d'une tradition française*, Mémoire de DEA de Cercle supérieur d'histoire du XX^e siècle, IEP (Paris), 1986, p. 60.
- 23) C. Ysmal, *Le RPR et l'UDF*, p. 14. 87年10月の時点でも、危険であるとの回答が5%, 危険でないが27%であったが、RPR 支持者の35%, UDF 支持者の31%は、FN を危険とは考えていない。SOFRES, *L'état de l'opinion*, 1988, p. 136.
- 24) S. Dumont, J. Lorient et K. Criton, *op. cit.*, p. 191. しかし、以後シラクが、FN との積極的協力に踏み込むことはなかった。最大限、地方レベルでの協力を容認した程度であった。85年県議選の際には、シラクは、地方レベルも含めて FN との協力を否定し Francis Bergeron et Philippe Vigier, *De Le Pen à Le Pen*, 1985, p. 198, 以降、原則として、FN を政治的パートナーとしては拒み続けている。
- 25) S. Dumont, J. Lorient et K. Criton, *op. cit.*, p. 191.
- 26) M. Charlot, *op. cit.*, p. 43. 例えば、J・ゴードンは「ルペンは敵ではなく、競争相手である」と発言し D. Calderon, *op. cit.*, p. 205, 他にも、CNIP の副党首ミッシェル・ジュノ Michel Junot も「右側に敵はいない」と FN を擁護していた。M-J. Ch. de Lauwe, *op. cit.*, p. 111.
- 27) S. Dumont, J. Lorient et K. Criton, *op. cit.*, p. 193, C. Ysmal, *Le RPR et l'UDF*, p. 12, A. Rollat, *op. cit.*, p. 113.
- 28) J. W. Freind, *op. cit.*, p. 217.
- 29) J. G. Sheilds, *op. cit.*, p. 150.
- 30) M. A. Schain, *op. cit.*, p. 244.
- 31) F. Matonti, *op. cit.*, pp. 7-17.
- 32) E. Plenel et A. Rollat, *op. cit.*, p. 69.
- 33) *Ibid.*, p. 70.
- 34) M. A. Schain, *op. cit.*, p. 244, C. Ysmal, *Le RPR*, p. 1878, M-J. Ch de Lauwe, *op. cit.*, p. 111.

- 35) D. Calderon, op. cit., pp. 208-9, M. Charlot, op. cit., p. 43, P. Perrineau, *Quel avenir*, p. 41, J. Lorien, K. Criton et S. Dumont, op. cit., p. 301 保守陣営から FN の幹部に転身した最も顕著な例は、ジャン・マリ・シュワリエ Jean-Marie Chevalier である。彼は、1964年にランスの商工会議所への入会を皮切りに、ランス青年経済会議所、ジスカル・デスタン支持委員会、「展望と現実クラブ un club Perspective et Réalité」などの要職を歴任し、旧参戦兵士担当国家次官モーリス・プランティエ Mourice Plantier (RPR) の報道担当官に就任し、1981年以降は、RPR・UDF に FN との接近を熱心に働きかけていた。そして、共和党から FN に加入した後は、ルベンの官房の責任者として、FN の「新らし顔」を代表する役割を果たしている。J. Chatain, op. cit., pp. 148-50.
- 36) G. Birnbaum et S. François, 'Le Front national joue les ambiguités', *Projet*, 208, décembre 1987., p. 58.
- 37) Pierre Jouve et Ali Magoudi, *Les dits et les non-dits de J-M*, Le Pen, 1988, p. 21, J. G. Shields, op. cit., p. 145.
- 38) 結局、シラクは、第1回投票では、ミッテランとバールと中道票を争い、第2回投票ではルベン票を狙って右往左往し、結局、「アイデンティティ・クライシス」を露呈した。F. Furet, J. Juillard et P. Rosanvallon, op. cit., p. 18, シラク陣営では、第2回投票を前に、ルベン有権者の取り込みを狙った試みが展開されている。内相 Ch. バスカは「FN には、確かに何人かの過激派がいる。しかし、本質的には、FN は保守と同じ関心・価値を唱えている。ただ、FN は、それを少し激しく、騒々しいやり方で表現しているに過ぎない。[……] FN 有権者が、コントロールされない移民が公的秩序や国民的アイデンティティに及ぼす危険性に関心を持つことは、私には正当なことと思えるし、われわれも、そのような不安を分かち持っている」と FN 有権者を意識した発言をしている。*Le Monde, L'élection présidentielle* 1988, p. 61. また、レパノンでの人質解放作戦などは、FN 有権者へのアピール効果を狙ったものとの指摘もある。J. G. Shields, op. cit., p. 146.
- 39) Ph. Habert, P. Perrineau et C. Ysmal, 'François Mitterrand : un héritage et une conquête', *Le Figaro/Études politique-L'élection présidentielle*, 1988, p. 26. 第2回投票では、第一回のルベン票の22%がミッテランに流れており J. W. Freind op., cit, p. 190, また、ルベン票の29%が、第二回投票では棄権に回っている。P. Perrineau, *l'exception présidentielle*, p. 36.
- 40) C. Granot, op. cit., p. 12.
- 41) シラクは、サッチャー、レーガンのフランス版として自分をアピールし、ジスカル・デスタンや社会党との違いを強調し、ネオ・リベラリズムの立場を鮮明にした。Hugues Pontelli, op. cit., p. 275. しかし、その意図に反して、保守のネオ・リベラリズムへの転換は、決して成功したとは言えない。左翼にたいするオルタナティブとして提起された保守のネオ・リベラルなプロジェは、国民には受け入れられなかった。国民は、左翼政権には「失望はしていたが、それにもかかわらず、

断固としてミッテラン政権の初年度のもたらしたものに愛着を持っていた」のである。D. Calderon, op. cit., そして、人種主義的でナショナリスティックな主張では、FNの単純で明解なディスコースには及ばなかった。そこに、保守の陥っているジレンマがあると言えよう。

- 42) C. Ysmal, *Le RPR et l'UDF*, p. 15.
- 43) C. Ysmal, *Un RPR*, p. 1878.
- 44) S. Dumont, J. Lorient et K. Criton, op. cit., p. 276.
- 45) M. A. Schain, op. cit., p. 241.
- 46) S. Dumont, J. Lorient et K. Criton, op. cit., p. 277.
- 47) Ibid., p. 301. RPR で FN 孤立化工作を中心的に進めた人物として, Ch. パスカ, ロベール・パンドゥロー Robert Panderaud (1985年当時セヌ・サン・ドニ県の国民議会候補) の名があがっている。その工作は, RPR・UDF の支持者を指導部の決定に従わせ, FN との協力から離れさせることに貢献したと評価されている。G. T. M. Monteiro, op. cit., p. 158.
- 48) しかし, CNIP の全国書記 M・ド・ロストラン Rostolan 他の若干のメンバーは, 党の決定を不服として FN と行動をともにした。G. Birnbaum, 'Front national d'un groupuscule', *Intervention*, mars 1986, p. 31.
- 49) P. Perrineau, 'Le Front national : Les clefs de la défaite' (以下 Les clefs と略す), *Revue politique et parlementaire*, n°940, mars-avril 1989, p. 20.
- 50) Ibid., p. 8.
- 51) P. Perrineau, *Les ressorts*, p. 21.
- 52) P. Perrineau, *Quel avenir*, p. 36.
- 53) Jean Viard, 'Déplacement Marseillais', in N. Mayer et P. Perrineau (dir.). op. cit., pp. 7-18.
- 54) H. Rey et J. Roy op. cit., p. 26.
- 55) Jean Ronger, 'Cercle des sympathisants', in N. Mayer et P. Perrineau (dir.), op. cit., pp. 140-1.
- 56) 87年10月の SOFRES 調査によると, 88年大統領選で FN に投票すると答えた者は, PS 支持者では 3% であったが, PCF 支持者では 11% に達している。SOFRES, *L'état de l'opinion*, 1988, p. 138.
- 57) P. Milza. op. cit., p. 416. H. Portelli, op. cit., p. 300
- 58) FN は自らを「極右 L'extrême droite」とは規定せずに「極端な右翼 la droite extrême」と自称していたが, それは, FN の穏健化戦略を反映した呼称選択であった。実際は, 80年代にはいっても指導部は, 長い極右運動でのキャリアを持つ人物によって構成されていたし, ネオ・ファシスト, 革命的ナショナリスト, カトリック・アンテグリスト派など, 極右的体質濃厚に持つ分子を党内に抱えていた。Christophe Vourseiller, *Les ennemis du système-Enquête sur les mouvements extrémistes en France*, 1989, pp. 131-35, G. Birnbaum. *Les stratégies du Front*

national : participation au champ politique et démarcation, Mémoire pour la DEA de Sociologie politique, Université de Paris I, 1985, pp.77-100.

- 59) J. W. Friend, op. cit., p. 192, P. A. Taguieff, 'De l'anti-socialisme au national -racisme-Deux aspects de la recomposition idéologique des droites en France', *Raison présente*, 1988, p. 16.

おわりに

1989年3月、市町村会議員選挙が行なわれた。前回の1983年では、FNは、3万人以上の都市のうち4都市でしか候補者をたてることができず、2～4%の得票率にとどまる「泡沫政党」にすぎなかった¹⁾。しかし、今回は、3万人以上の都市の2/3(219都市中143)、1万人以上では1/3の都市で候補を立て、FNが選挙に参加した9000人以上の30都市では10.2%の得票をあげている²⁾。極めて地方レベルの選挙にしては、FNは善戦し、その安定的有権者の存在を示した。そして、本文中でも触れたが、FNの第二回投票での候補維持という方針に、FN有権者は忠実に従い、保守に打撃を与えた³⁾。FNが選挙の攪乱要因である状況は、依然続いており、特に、保守にとって、第二回投票でFNのデジストマンが得られぬ場合、左翼陣営との決戦投票で困難な状況に追い込まれるということが如実に示された。

次に、同年6月には、ヨーロッパ議会選挙が実施された。FNのルペン・リストは、2,128,589票(11.73%)を獲得し10人を当選させている。前回(1984年)が、2,204,961票(10.95%)であるから、FNは得票数では8万票程減らしてはいるが、得票率では逆に伸びている⁴⁾。ヨーロッパ議会選挙といっても、有権者は国内的争点を意識して投票する傾向のある選挙で、政権を担う社会党に厳しい審判が下され(4,284,743票, 23.61%)、FNがその勢力を維持したことは、現実政治への不満が広範に存在しており、FNの批判勢力としての存在意義が低下してはいないことを示している。

そのことは、最近行われた国民議会補欠選挙の結果でも明らかになった。1989年12月に実施された同選挙で、FN候補マリー-フランス・スティルボワが61%という驚くべき得票で当選した。彼女の当選は、86年国民議会選挙で

の唯一の当選者が、その後党を離れたため国民議会で議席を持っていなかった FN に、貴重な議席をもたらしたわけである。彼女が当選した選挙区（ウール・エ・ロワール 2 区）は、彼女の夫である故ジャン・ピエール・スティルボア（1988年11月事故死）が、83年に FN の躍進が始まる以前から党勢拡大に務め、FN の模範的選挙区の一つではあったが、今回の選挙で、改めて、90年代も、「ルペン現象」を生み出し、維持し続ける諸要素が克服されずに存在しつづけることを予想させた⁵⁾。

さて、われわれは、1983-88年の諸選挙の分析を通じて、如何なる社会的・政治的・経済的文脈にみいて、どのような有権者が、どのような動機で、極右の泡沫政党に過ぎなかった FN を、フランスの政党システムにおいて無視しえない政治勢力に押し上げたのかということを明らかにしえた。簡単にまとめておけば、第一に、FN を、政党システムに参入し、恒常的要素へと定着させたのは、社会的・経済的・政治的諸要素の複合した作用であること。特に、移民・犯罪・失業といったテーマが、FN によって巧妙に利用され、FN へと有権者を動員する力を発揮したこと。

第二に、FN の成功は、その有権者構成に反映されていること。即ち、過去の極右の狭い支持基盤を抜けだし、左右の既成政党の支持者を回収し、各社会層に広く浸透しえたことに、その躍進の秘訣があった。特に、保守勢力の不満をもつ部分に食い込んだことが、FN の支持層・活動家の拡大に大きく貢献した。また、そのことは、FN に、名望性と信頼性を与え、穏健な党へのイメージ転換を容易にした。

第三に、急進化した保守有権者と、左翼政権の政治に失望し、社会的・経済的環境の悪化に悩み、既成政治に不信と不満を持つ有権者の合流によって構成されていた FN 有権者は、84年以降、顕著に後者の割合が増大していくこと。即ち、FN は、社会的フラストレーションを表現する役割を強めて行く。そのことは、指導部が党に与えようと苦心してきた、穏健な責任政党のイメージと、有権者の多くが FN に期待しているものが一致していないことを示している。

第四に、FN の台頭は、フランスの政党システムに無視しえない攪乱要因となっていることである。特にそれは、保守勢力に深刻な影響を与えた。即ち、

2 回投票多数代表制の下では、左翼を破るためには、FN の票が必要である場合、極右と協力するというマイナス・イメージを引き受けても左翼に対する勝利を優先させるかどうかの選択に、保守は直面した。それを巡って、保守陣営では、少なからぬ混乱を経験した。88 年大統領選挙でシラクが見せたような中道の有権者と FN 有権者の間での峻巡は、FN が勢力を保ち続けるなら、95 年にも保守の大統領の実現を阻む最大の障害として立ちはだかるであろう。

さて、以上が、本稿で展開された FN のフランス政治生活への参入と定着に関する結論であるが、最後に強調しておきたいことは、FN の政治舞台への登場は、フランス政治と社会の変容と深く関係しているということである。

即ち、70 年代からフランスを苦しめてきた経済的・社会的危機が決して解決されたとは言えないことと、それを解決せんとする試みが逆に新たな問題を生み出していることである。左翼政権の登場は、国民の中に経済・社会問題の解決の希望を与えた、そして、左翼政権も、その統治の初期には、左翼版ケインズ政策によって国民の期待に応えようとした。しかし、その挫折の後には、経済危機の克服をめざして緊縮と近代化の路線に転じた。その結果、一方には、先端産業や第 3 次産業を中心に不況を脱したセクターと、他方で、緊縮と産業再編によって打撃を受け、不況から抜け出せない業種と地域のコントラストが浮かび上がった。そして、個人レベルでも、脱産業社会に難無く適応しえた国民と、移民も含めて、自分の子供にも上昇の希望が与えられていないと感じる人たちが存在している。そのような発展しつつあるセクターと切り捨てられつつあるセクターの「二重構造」を背景にして、生じている国民の間の対立や不安、不満の結晶点が移民問題である⁶⁾。本稿においても、移民問題が、FN を選挙で押し上げた最大の 이슈であったことには触れたが、その問題が、フランスの抱える経済的・社会的の構造的問題に根差し、国民的アイデンティティの危機に連動しているものだけに、簡単には解決しえないであろう。

そして、そのような不安・不満に既成政治勢力が有効に対応していないことが、FN に有利な条件を作り出した。81 年に成立した左翼政権は資本主義との「訣別」路線をかかっていたが挫折し、代わって 84 年に成立した保守政

府も、積極的な成果を上げることができず、左右両翼のとも国民を満足させることはできなかった⁷⁾。フランス政治は、左右両翼の激しく対立する時代からミッテラン政権の下で、社会党と保守の間の根本的差異は縮小して行き、核戦略、フランスの「世界における役割」、経済への国家介入、福祉国家、教育、政治諸制度をめぐる広範なコンセンサスが形成されている⁸⁾。

そのように左右を貫いてリアリズムが支配している中で、一方では、各種選挙での棄権率の上昇が示しているように、政治に対する諦めや無関心が増大しているが⁹⁾、国民のなかに醸成されている不満や不安は、ある種のポピュリズム的政治代表を稀求する。自らの社会的・経済的苦境に民衆的で簡明な解釈を提供し、意思表示の手段となるような代表を求める。従来、ポピュリズム的メンタリティをドゴール派、フランス共産党が、最近では社会党が吸収してきた。しかし、ドゴール派は、シラクの下でネオ・リベラリズムの路線に傾斜し、フランス共産党は、そのイデオロギーの魅力を急速に失い、社会党は、政権を運営するなかで緊縮と近代化の党として変身をとげている。

故に、国民のなかにある、特に、都市的環境の悪化という形で社会的・経済的問題が比較的可視的な都市部在住の住民に蓄積されている不満と不安のエネルギーは、ポピュリスト的資質を有する指導者ルペンを擁するFNによって、政治的に組織されて行くのであった¹⁰⁾。即ち、社会に沈黙している不満と不安を、既成政党とその政治に対する「体系的否認・拒絶」へと誘導し¹¹⁾、フランス政治を貫くコンセンサス・システムに挑戦する役割を、FNが演じているのである。

以上のような役割を、フランスの政治システムにおいてFNが果たしている以上、フランスの経済的状況が好転し、社会的アノミーが改善され、有効な都市管理システムが組織され、有効な政治的代表システムが構築されないならば、FNが、以前の政治的ゲッターへと再び封じこめられることはないであろう。他方、88年大統領選挙時に、ルペンに投票した者のうち17%だけが、彼を最良の大統領候補と考え、28%しかルペンの当選を望まず、26%はシラク、16%はバール、17%はミッテランの勝利を願っているというように¹²⁾、FNの成功は決して「抗議の容器」¹³⁾ではあっても、フランスの諸困難に対する有効なオルタナティヴを提起し、有権者の合意を調達しているわけではない。

その意味で、FN が政権を掌握する可能性はないとしても、フランスの危機の関数として、90年代も政治生活において注目される存在であり続けることは確かであろう。

- 1) P. Perrineau, *Les clefs* p. 18.
- 2) 'Ibid., p. 20.
- 3) Gérard Le Gall, 'N ovations et paradoxes des municipales 89', *Revue politique et parlementaire*, no. 940. mars-avril 1989, p. 13.
- 4) G. Le Gall, 'Un triple avvertissement-Pour l'Europe, la démocratie et les socialistes', *Revue politique et parlementaire*, no. 942, juillet-août 1989, p. 12.
- 5) *Le Point*, no. 899, 17 décembre 1989, p. 322. François Gaspard, 'L'évolution du FN à Dreux et dans les environs (1978-1989)', *Revue politique et parlementaire*, n°945, janvier-février 1990, pp. 62-9.
- 6) *Le Monde, sélection hebdomadaire, Edition internationale*, no. 2145, du jeudi au mercredi 13 décembre 1989.
- 7) シラク政府は、88年1月の SOFRES 調査によれば、雇用政策(支持33%, 不支持45%), 経済政策(支持32%, 不支持42%), 社会政策(支持34%, 不支持45%), 移民政策(支持27%, 不支持47%)と、否定的評価を与えられている。G. Le Gall, 'Présidentielle 1988: une opinion cristallisée?', *Revue politique et parlementaire*, no. 934, mars-avril 1988, p. 24.
- 8) H. Penniman, op. cit., p. 235, Denis Jeambar, 'Le pavo Le Pen', *Le Point*. 18 décembre 1989, p. 43, Alain Duhamel, op. cit., p. 152.
- 9) 80年代にフランスでは、投票率の低下が問題にされているが(例えば Michel Hasting, 'Urnes en jachère', *Revue politique et parlementaire*, no. 942, juillet-août 1989.), FN の台頭をもたらした既存政治への有権者の不信や政治の有効性感覚の低下の別の表現に過ぎない。F. Furet, K. Juillard et P. Rosanvallon, op. cit., p. 73.
- 10) ルペンのポピュリスト的魅力については、屢々言及されている。ルペンは人民の一員を自認し、現実生活を配慮しているという印象を与えることに務め、制度化された言語より、簡単で民衆的な言語で語りかけた。A. Chebel, op. cit., pp. 37-9, F. Cambell, op. cit., pp. 52-4. FN が84年以降、ますます民衆的階層にその支持を拡大しているのは、党首ルペンのカリスマ的で民衆的な魅力に負っていることは否定しえない。
- 11) Gereido T adeu Moreira Monteiro, *Le Front national et suffrage universel, Mémoire du DEA de sociologie politique*, Paris 1, 1986, p. 98.
- 12) J. G. Shields, op. cit., pp. 144, 153.
- 13) *Ibid.*, p. 145.